

浜松城跡 11

2016年2月

浜松市教育委員会





# 浜松城跡 11

---

HAMAMATSU CASTLE

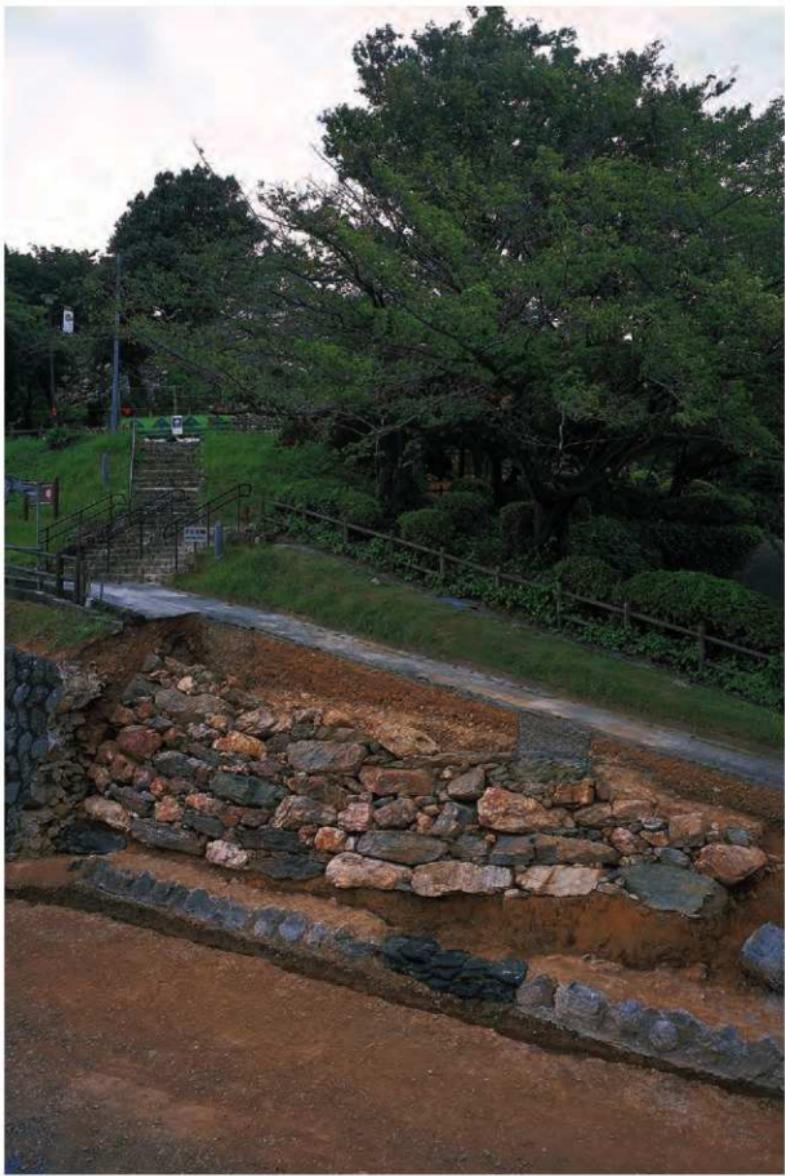
The 14<sup>th</sup> excavation report

Hamamatsu Municipal Board of Education

2016

浜松市教育委員会





8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) の完掘状況 (南東より)

巻頭図版 2



1 8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) 全景 (南より)



2 8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) 近景 (南東より)



1 8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) 全景 (東より)



2 8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) の東端断面 (東より)

巻頭図版 4



4 トレンチ 登り堀跡西側石垣 (SL03) 完掘状況 (南西より)



1 4 トレンチ 登り堀跡西側石垣 (SL03) 完掘状況 (西より)



2 4 トレンチ 登り堀跡西側石垣 (SL03)、柱穴 (SP01・02)、土塁跡 (SL03) の完掘状況 (南より)

巻頭図版 6



1 2 トレンチ 全景 (南西から)



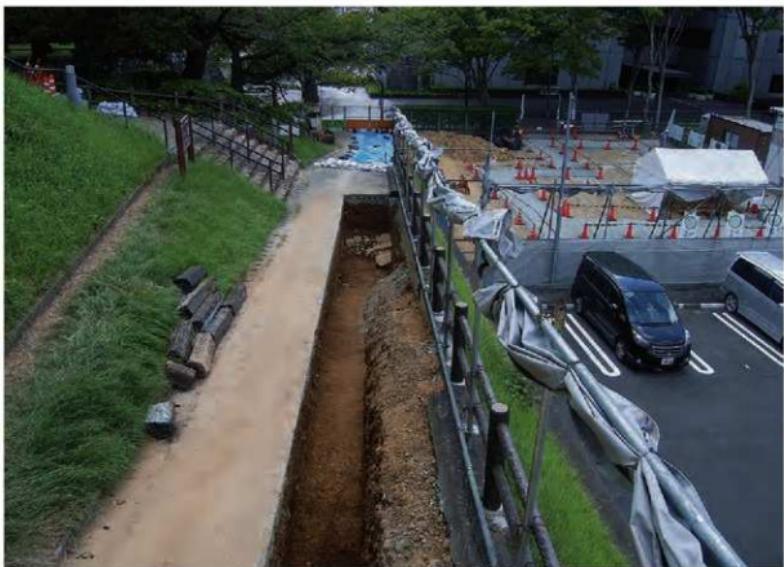
2 2 トレンチ 全景 (北東から)



3 2 トレンチ 溝状構造 (SX01) 北東岸の遺物出土状況 (南から)



1.5 トレンチ 土壌跡 (SL03) と北側現況土壌 (西より)



2.7 トレンチ 全景 (西より)

卷頭図版 8



1 2 トレンチ 溝状遺構 (SX01) 出土遺物



2 全トレンチ出土瓦類

## 例　　言

- 1 本書は浜松城公園及び隣接地（静岡県浜松市中区元城町100-2ほか）における浜松城跡（14次調査）の発掘調査（確認調査）報告書である。なお、13次調査と15次調査の成果についても、第1章で触れている。
- 2 発掘調査は、浜松城公園歴史ゾーン及び南エントランスゾーン整備事業に先立ち、埋蔵文化財の状況を確認するために実施した。発掘調査は、浜松市（都市整備部公園課）の依頼を受けた、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、実務は浜松市から委託を受けた国際文化財株式会社が担当した。調査にかかる費用は、国土交通省の社会資本整備総合交付金の補助を受け、浜松市が負担した。
- 3 発掘調査にかかる面積と期間は、以下の通りである。

調査面積	248m <sup>2</sup>
委託期間	平成27年（2015年）5月28日～平成28年（2016年）2月19日
（うち現地調査期間 平成27年（2015年）6月19日～9月30日）	
- 4 調査は、鈴木一有・井口智博（浜松市市民部文化財課）の指示のもと、辻広志（国際文化財株式会社）が担当し、豊島威信（国際文化財株式会社）が補佐した。
- 5 本書の執筆は、第1章1～5を井口智博が、その他を辻が行った。現地調査における写真撮影は主に辻が行い、一部を井口が行った。遺物の写真撮影は辻が行った。編集は辻が行ない、花卉晶子（国際文化財株式会社）が補佐した。
- 6 調査にかかる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。
- 7 本書で用いる座標値は、世界測地系（測地成果2000）に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 8 土層・土器の色調は『標準土色図』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
- 9 本書では参考文献等の表記において、以下のような略称を用いる。

教育委員会→教委	(財) 浜松市文化振興財團→浜文振
----------	-------------------
- 10 現地調査、整理作業及び本書の編集にあたり、以下の方々からご協力・ご指導を賜った。  
なお、瀬戸・美濃產陶器の編年的位置づけについては、藤澤良祐氏のご教示を得た。  
(敬称略、順不同)  
加藤理文、河合修、北垣聰一郎、千田嘉博、藤澤良祐、向坂鋼二

# 浜松城跡 11

## 目 次

### 巻頭図版

### 例 言

第1章 序論 .....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 浜松城をめぐる環境.....	2
3 浜松城跡の調査の履歴.....	4
4 13次調査の成果.....	6
5 15次調査の成果.....	8
6 14次調査の方法と経過.....	10
第2章 14次調査の成果 .....	11
1 天守曲輪南西側の空堀跡と西端城曲輪の調査.....	11
2 本丸西側の土塁と登り堀の調査.....	22
3 本丸南側石垣及び本丸南側空堀の調査.....	34
第3章 総括 .....	43
1 天守曲輪南西部の成果.....	43
2 西端城曲輪の成果.....	43
3 本丸西側の成果.....	44
4 本丸南側石垣及び本丸南側空堀の成果.....	45

## 卷 頭 図 版

- |  |  |
|--|--|
| 1    8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) の<br>完掘状況 (南東より) | 5  2  4 トレンチ 登り堀跡西側石垣 (SL03) 、<br>柱穴 (SP01・02) 、土壙跡 (SL03) の<br>完掘状況南より) |
| 2  1  8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) 全景<br>(南より)     | 6  1  2 トレンチ 全景 (南西から)   |
| 2  8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) 近景<br>(南東より)       | 2  2 トレンチ 全景 (北東から)  |
| 3  1  8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) 全景<br>(東より)     | 3  2 トレンチ 溝状遺構 (SX01)<br>北東岸の遺物出土状況 (南から)                                |
| 2  8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) の<br>東端断面 (東より)    | 7  1  5 トレンチ 土壙跡 (SL03) と<br>北側現況土壙 (西より)                                |
| 4  4 トレンチ 登り堀跡西側石垣 (SL03)<br>完掘状況 (南西より)   | 2  7 トレンチ 全景 (西より)   |
| 5  1  4 トレンチ 登り堀跡西側石垣 (SL03)<br>完掘状況 (西より) | 8  1  2 トレンチ 溝状遺構 (SX01) 出土遺物<br>2 全トレンチ出土瓦類                             |

## 図 版

- |   |  |
|---|--|
| 1  1  1 トレンチ 全景 (南から)                   | 5  3  4 トレンチ 3-1層上面埴瓦出土状況<br>(南西より)        |
| 2  1 トレンチ 堀跡 (SD01) 北岸 (南から)            | 4  4 トレンチ SL03と埴瓦出土状況<br>(南西より)            |
| 3  1 トレンチ 全景 (北から)                      | 5  4 トレンチ SL03と埴瓦出土状況 (南より)                |
| 2  1  2 トレンチ 全景 (南西から)                  | 6  1  4 トレンチ 登り堀跡西側石垣 (SL03)<br>完掘状況 (西より) |
| 2  2 トレンチ 全景 (東から)                      | 2  4 トレンチ SL03根石 (西より)                     |
| 3  2 トレンチ 堀跡 (SD02) 南西岸<br>(南西から)       | 3  4 トレンチ SL03内の丸瓦 (西より)                   |
| 4  2 トレンチ 井戸状遺構 (SX02) 全景<br>(北西から)     | 4  4 トレンチ SL03と柱穴 (南より)                    |
| 5  2 トレンチ 井戸状遺構 (SX02) 全景<br>(南西から)     | 7  1  5 トレンチ 全景 (西より)                      |
| 3  1  2 トレンチ 溝状遺構 (SX01) 全景<br>(南西から)   | 2  5 トレンチ SL04の南下がり斜面<br>(南西より)            |
| 2  2 トレンチ SX01下層須恵器壺出土状況                | 3  5 トレンチ SL04の南下がり斜面 (西より)                |
| 3  2 トレンチ SX01下層灰釉腰折皿 (18)<br>出土状況      | 1  6 トレンチ 全景 (南西より)                        |
| 4  2 トレンチ SX01下層擂鉢 (20) 出土状況            | 8  2  6 トレンチ 北壁断面 (南より)                    |
| 5  2 トレンチ SX01下層把手付鉢 (17)<br>出土状況       | 3  7 トレンチ SL02西端上面 (北西より)                  |
| 4  1  3 トレンチ 全景 (北より)                   | 4  7 トレンチ SL02西端上面 (東より)                   |
| 2  3 トレンチ 全景 (南西より)                     | 9  1  8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02)<br>残存部西側 (南より)  |
| 3  3 トレンチ 堀跡 (SD02) 南西岸と<br>南東壁断面 (北より) | 2  8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02)<br>残存部東側 (南より)     |
| 5  1  4 トレンチ 全景 (西より)                   | 10  8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02)<br>裏込完掘状況 (西より)   |
| 2  4 トレンチ 全景 (東より)                      |  |

11.1	8トレンチ SL02西壁側面の裏込状況 (東より)	13	1・3トレンチ出土遺物 (1T:1~13、3T:34~36)
2	9トレンチ 全景(西より)	14	2トレンチ出土遺物
3	8・9トレンチ SX03完掘状況(北より)	15	4・5トレンチ出土遺物 (4T:37~47、5T:48~49)
4	8・9トレンチ SX03底の円礎(北東より)		
12.1	10-1トレンチ 調査状況(北より)	16	5・7・8・10トレンチ出土遺物 (5T:50~58、7T:59・60、8T:61、 10T:62~67)
2	10-2トレンチ 調査状況(南より)		
3	10-3トレンチ 調査状況(北より)		
4	10-4トレンチ 調査状況(北より)		

### 挿図目次

Fig. 1	浜松城跡の位置	1	Fig. 20	4トレンチ実測図及びSL03詳細図	24
Fig. 2	浜松城跡の周辺地形	2	Fig. 21	5トレンチ実測図	25
Fig. 3	浜松城跡復元図	3	Fig. 22	6トレンチ実測図	26
Fig. 4	浜松城跡における調査・立会等箇所図	5	Fig. 23	1985年に確認した本丸南側石垣	27
Fig. 5	13次調査区配図	6	Fig. 24	7トレンチ実測図	28
Fig. 6	13次調査実測図	7	Fig. 25	4トレンチ出土遺物1	29
Fig. 7	15次調査区配図	8	Fig. 26	4トレンチ出土遺物2	30
Fig. 8	15次調査実測図	9	Fig. 27	5トレンチ出土遺物1	31
Fig. 9	8Tr. の石垣調査状況	10	Fig. 28	5トレンチ出土遺物2	32
Fig. 10	8/22の現地説明会風景	10	Fig. 29	7トレンチ出土遺物	33
Fig. 11	調査トレンチ配置図	11	Fig. 30	8トレンチ実測図	35
Fig. 12	1トレンチ実測図	12	Fig. 31	8トレンチSL02実測図	36
Fig. 13	2トレンチ実測図	14	Fig. 32	8トレンチ西壁断面・見通し図	37
Fig. 14	2トレンチSX01遺物出土状況図 及びエレベーション図	15	Fig. 33	8トレンチSX03実測図	38
Fig. 15	3トレンチ実測図	17	Fig. 34	9トレンチ実測図	39
Fig. 16	1トレンチ出土遺物	18	Fig. 35	8トレンチ出土遺物	40
Fig. 17	2トレンチ出土遺物	19	Fig. 36	10トレンチ実測図	41
Fig. 18	3トレンチ出土遺物	20	Fig. 37	10トレンチ出土遺物	42
Fig. 19	4トレンチの現況図及び3-1層上面遺物 出土状況図	23	Fig. 38	浜松城跡推定遺構配置図	46
			Fig. 39	安政元年(1854)『浜松城絵図』	47

### 挿表目次

Tab. 1	浜松城跡における調査等の履歴	4	Tab. 2	出土遺物観察表	48
--------	----------------	---	--------	---------	----

# 第1章 序論

## 1 調査に至る経緯

静岡県浜松市中区に所在する浜松城跡は、市の中心部に位置し、天守曲輪を中心とする中枢部には一部の石垣が残存しており、浜松市指定史跡として保護されている。また、城跡の一部は浜松城公園として整備され、都市部の貴重な憩いの場として市民に親しまれている。

近年の浜松城公園は、利用者ニーズの多様化、各施設の老朽化などの課題が生じ、再整備の必要性が求められてきた。そこで、市中心部の都市機能を充実させるため、公園及びその周辺において、長期的な視野に立った整備が検討されることになり、2009年に浜松城公園歴史ゾーンの整備基本構想が策定され、2011年には基本計画が策定された。

そうした状況の中、浜松城公園歴史ゾーン整備基本設計に先立ち、浜松市（都市整備部公園課）と浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が協議を行なった。その結果、西端城曲輪、清水曲輪、本丸南側周辺における遺構・遺物の残存状況を把握するための確認調査を実施し、今後の整備に向けた検討材料とすることとなった。

調査は、浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が行い、実務は、浜松市から業務を受託した国際文化財株式会社が実施した。現地調査は2015年6月19日から9月30日にかけて実施した。調査面積は248 m<sup>2</sup>である。

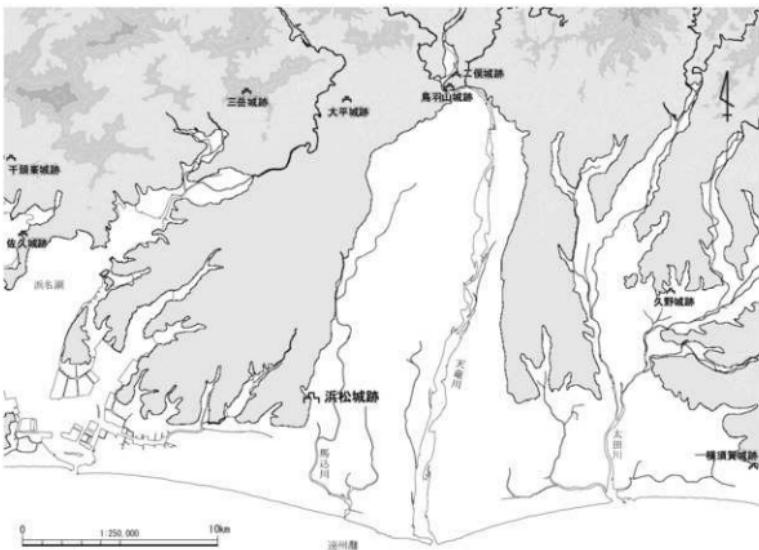


Fig. 1 浜松城跡の位置

## 2 浜松城をめぐる環境

**地理的環境** 浜松城跡は、三方原台地の東縁部に位置し、天竜川沖積平野に臨む河岸段丘を利用して築城されている。最大で東西600 m、南北700 mの城域を有する連郭式の平山城であり、最高所に築かれた天守曲輪から東側の平野部に向かって本丸、二の丸、三の丸と階段状に主要な曲輪が築かれている。また、城跡の北側や南側には入り組んだ谷地形や低湿地がみられ、それらを巧みに取り入れながら曲輪や堀が配置されている。

**歴史的環境** 【原始・古代】浜松城跡周辺において、原始～古代の集落遺跡の存在は確認されていない。一方で三方原台地東縁部は古墳の多い地域であり、浜松城域においても、当地域では数少ない横穴墳である作左山横穴の存在が知られている。また、浜松城域では過去の工事で須恵器が出土しており、他にも後期古墳の存在がうかがわれる。

【中世】浜松城の前身である引馬城は、現在の東照宮付近一帯の小規模な丘陵地に位置する。15世紀代に築城されたとみられ、15世紀末～16世紀代の遺物が出土している。また、引馬城の東側には中世東海道の宿場町として引馬宿が栄えていた。引馬城築城時の城主は不明であるが、16世紀前半には今川氏配下の飯尾氏が城主を務めていた。元亀元（1570）年に徳川家康が岡崎城から

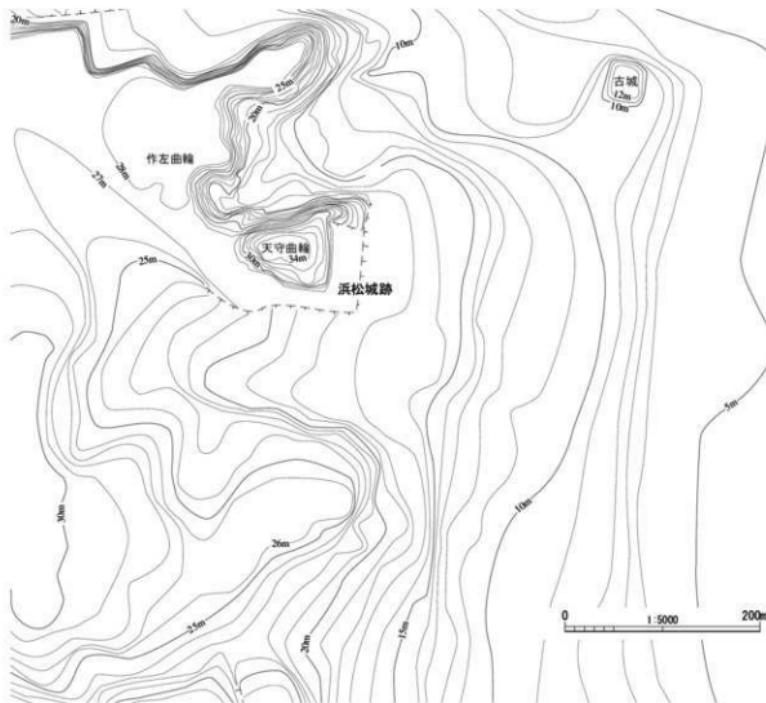


Fig. 2 浜松城跡の周辺地形

引馬城に移ると、城城を西側の段丘へと拡張して浜松城と改称したとされる。家康在城期の浜松城の構造は不詳であるが、石垣や瓦葺建物のない中世的な城であったとみられる。天正18（1590）年、家康の関東移封に伴い豊臣秀吉配下の堀尾義晴が入城すると、浜松城は現在みられる野面積みの石垣が築かれ、天守をはじめとする瓦葺建物が建築されたと考えられている。

【近世】現在残る絵図等をみると、江戸時代前期には天守曲輪・本丸・二の丸等に加え、三の丸や城下町の整備までがほぼ完了していたとみられる。一方で天守はすでに失われていたとみられ、その姿は描かれていない。幕末に至るまで改修を重ねながらも基本的な繩張りは踏襲された。また、東海道は城域の南端である大手門の前ではほぼ直角に折れ曲がって、直線的に馬込川へと延びるように整備され、沿道は宿場町として栄えた。浜松城の城主は、幕府の要職を務める譜代大名が短期間で務めるようになり、江戸時代を通じての城主は九家二十二代を数える。

【近現代】明治6（1873）年に廢城令が出されると、浜松城の建物は解体され、土地は払い下げられて、浜松城域の地形は大きく改変を受けた。昭和25（1950）年に動物園やプールなどを含む浜松城公園が開設され、昭和33（1958）年には天守台の上にRC造の復興天守が建築された。その後、動物園、プール等は撤去され、広場や駐車場等に再整備されている。

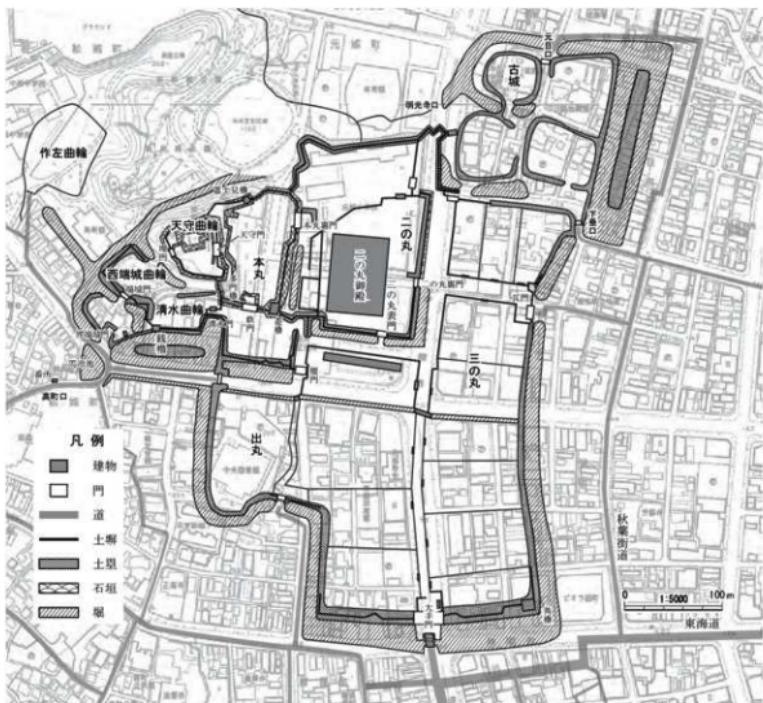


Fig. 3 浜松城跡復元図

### 3 浜松城跡の調査の履歴

**これまでの調査・工事立会等** 浜松城跡では、これまで18回にわたる発掘調査が行われている。いずれも小規模な本発掘調査かトレンチ掘削による試掘・確認調査であり、まとまった面積での本発掘調査は行われていない。また、その他にも工事立会、不時発見による現地踏査などが行われている。それらをTab.1とFig.4にまとめた。

Tab.1 浜松城跡における調査等の履歴

発掘調査				
名稱	年次	調査事由	成果等	文献
1次	1960年	浜松農工大による確認調査		
2次	1979年	市役所地下駐車場整備	工事時に石組が発見され、測量等を実施	浜松市教委1996
3次	1984年	電線地中化工事	天守曲輪周辺の調査で、末期の石垣等を確認	浜松市教委1984 浜松市教委1996
4次	2009年	浜松公園整備事業に伴う確認調査	天守門・富士見櫓の礎石等を確認	浜文版2010
5次	2010年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門櫓・富士見櫓の確認調査で、天守門櫓部の基礎構造を考えられる柱石を確認	浜文版2011
6次	2011年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門跡の確認調査で、櫓台石組の裏込め等を確認	浜文版2012a
7次	2011年	セントラルパーク構想策定に伴う確認調査	二つの丸の確認調査で井戸等を確認	浜文版2012b
8次	2012年	天守門復元工事	天守門に付随する瓦積み排水設備の全体像を確認	浜松市教委2013a
9次	2012年	セントラルパーク構想策定に伴う確認調査	作在山櫓等の確認調査で、柱穴等を確認	浜松市教委2013b
10次	2014年	市役所駐車場整備	溝渠等を確認	浜松市教委2013b
11次	2014年	遺物保存状況把握のための確認調査	引馬城跡（古墳）の確認調査で、土壇等を確認。かづらけが多段出土	浜松市教委2014b
12次	2014年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側の石垣。天守曲輪南側の空堀。桃園期以前に遡る大型遺構等を確認	浜松市教委2014b
13次	2015年	市役所駐車場整備に伴う確認調査	12次調査で確認したものと同一の可能性がある大型窓を確認	本報告書
14次	2015年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側石垣、天主曲輪南側の京極塀と西側城曲輪、本丸西側土塁と登り石を確認	本報告書
15次	2015年	中学校認定調査	浜松城跡の範囲内であるが、城郭に係る遺構は確認できず	本報告書
16次	2015年	三之丸跡確認調査	三之丸跡に係る遺構は未確認であるが、桃園期以前の遺構と遺物を確認	2017年以降報告予定
17次	2015年	天主曲輪南側土塁確認調査	天主曲輪南側土塁の遺存状態。土塁内側石垣底面、曲輪内敷地面の状況を確認	2017年以降報告予定
18次	2015年	道路整備による確認調査	北側放に係る遺構は確認できず	2017年以降報告予定
工事立会など(主なもの)				
記号	年次	事由	成果等	文献
A	1914年	中堅壁立工事	須志部出土	静岡県1930
B	1957年	市役所荷物建設	須志部出土	浜松市教委1996
C	1958年	復元天守建設	天守台で井戸跡を確認	浜松市教委1996
D	1960年	東京社設置建設	庵内より陶器等が出土	浜松市教委1996
E	1964年	跡地園内整備	作在山櫓穴を確認	向坂1976
F	1965年	紅葉城跡解説	本丸南側石垣を確認	浜松市教委1996
G	1993年	天守曲輪石垣補修	天守台の盛土や養込の状況等を確認	浜松市教委1993c
H	2012年	天守曲輪石垣改修	瓦が出土	浜松市教委2012
I	2012年	本丸工事	引馬城（古墳）北側の塹を確認	浜松市教委2014
J	2013年	市役所南側駆解体工事	出丸から「のれんにかけての屋」を確認	浜松市教委2015
K	2014年	マンション建設	三の丸東側の塹を確認	2016年報告予定

#### 参考文献

- 静岡県 1930『静岡縣史』第1巻(三編)
- 坂庭綱二、1976『浜松市動物園内作在山横穴墓』『森町考古』10
- 浜松市教育委員会 1984『浜松城天守曲輪周辺の発掘調査について』
- 浜松市教育委員会 1996『浜松市指定文化財 浜松城跡 一考古学的調査の記録』
- 浜松市文化振興課附註 2010『浜松城跡4次』
- 浜松市文化振興課附註 2011『浜松城跡5次』
- 浜松市文化振興課附註 2012a『浜松城跡6次』
- 浜松市文化振興課附註 2012b『浜松城跡7次』
- 浜松市教育委員会 2013a『浜松城跡8次』
- 浜松市教育委員会 2013b『浜松城跡9次』
- 浜松市教育委員会 2013c『浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2014『平成23年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2015a『平成25年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2015b『浜松城跡10』
- 浜松市教育委員会 2016a『浜松城跡11』
- 浜松市教育委員会 2016b『浜松における中世城跡の調査』

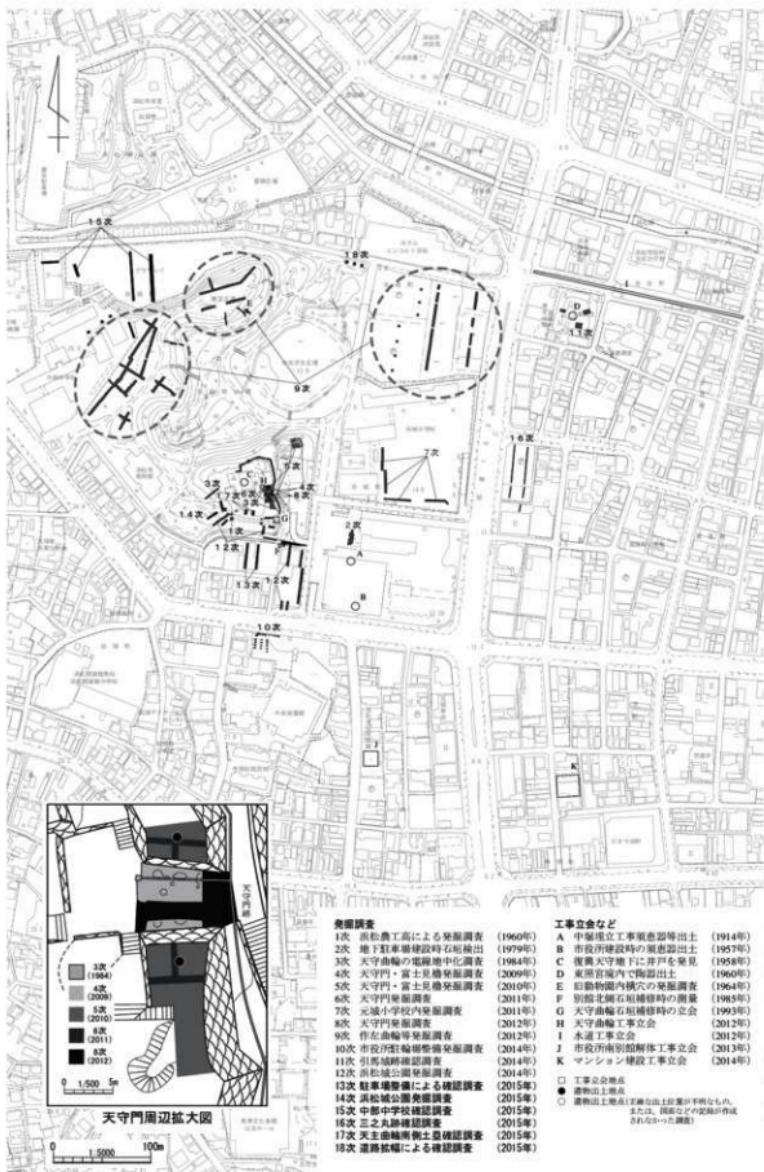


Fig. 4 浜松城跡における調査・立会等箇所図

#### 4 13次調査の成果

**調査の概要と経緯** 浜松城跡13次調査は、浜松市役所公用車駐車場整備に伴い実施された、試掘・確認調査である。調査は浜松市(浜松市財務部資産経営課)の依頼を受け、浜松市教育委員会(浜松市市民部文化財課が補助執行)が2015年1月20日～1月21日にかけて実施した。調査は鈴木一有と鈴木京太郎が担当した。

**調査の方法** 調査は、対象地内に2箇所の調査溝を設定して行った。各調査溝は重機で表土を掘削し、人力で調査溝内の精査を行なながら、遺構と遺物の有無を確認した。

**調査の成果** 調査対象地は、浜松城跡の清水曲輪と想定されている箇所である。約30m東側では2014年9～11月に確認調査(12次調査)が行われており、東西方向に延びる大型の溝が確認されている。この溝は、浜松城を描いた近世の絵図には全く描かれておらず、戦国期の遺物を含むことから、徳川家康在城期に堀として機能し、近世城郭へと変貌を遂げる段階で埋め立てられた可能性が考えられている。

調査対象地は、直前までマンションが建てられており、その基礎等によって地下は大きく擾乱を受けていた。土層の堆積状況はFig. 6のとおりである。現況地盤から約1mはマンションの建設・解体による擾乱が全体的に及んでおり、深い箇所では2m以上に達していた。ただし、長方形の敷地に平面L字形のマンションが建てられていたため、建築の及んでいない敷地北東部にあたる調査溝1の北部では、地表下約30cmで基盤層が検出され、大型の溝(SD01)を確認することができた。

検出したSD01の幅は約9.8mであるが、南側は擾乱を受けて破壊されており、実際の幅はさらに広いと考えられる。最深部は現況地盤から約1.2mを測るが、12次調査成果から当時の地盤は現状よりも約1m高いとみられるため、実際の深さは2m以上と想定される。土層の観察からは、人為的な埋立てが行われた後に、浅く窪んだ箇所への自然堆積が確認される。出土遺物は確認されていない。調査溝2では、全体的に擾乱が及んでいるため、SD01の存在を確認することはできなかつた。

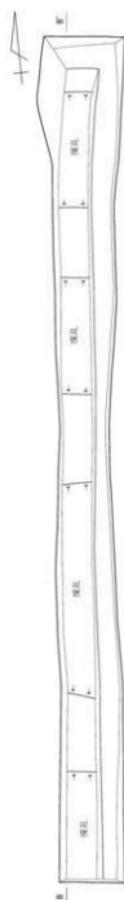
調査の結果、対象地全体に擾乱が及んでおり、戦国期～近代における遺構のほとんどが失われて



Fig. 5 13次調査区配置図

いると考えられるが、わずかに大型の溝SD01の一部を確認することができた。SD01には出土遺物がみられないため、掘削時期を明確にすることはできない。ただし、SD01の位置関係や形状、埋土の状態は、12次調査で確認された大型溝と近似しており、同一の遺構である可能性が考えられる。

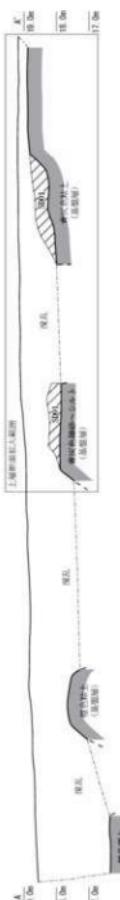
調査溝2



調査溝1



SD01土層拡大



SD01埋土

- 1 有杢白色粘土 (隈面粘土層)
- 2 前者灰色細砂 (暗灰色シルト)
- 3 黑色粘土
- 4 灰色シルト (青灰色細砂層)
- 5 青灰色砂 (褐色シルト層)
- 6 明褐色砂 (小型雜含)
- 7 暗褐色粘土
- 8 青灰色細砂
- 9 灰色粘土
- 10 灰色壤土 (小型雜含)
- 11 青灰色粘土と褐色粘土の混層
- 12 暗灰色細砂 (小型雜含)

Fig. 6 13次調査実測図

## 5 15次調査の成果

**調査の概要と経緯** 浜松城跡15次調査は、浜松市立中部中学校の敷地内で実施された、試掘・確認調査である。調査は浜松市（教育委員会学校施設課）の依頼を受け、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）2015年6月16日～6月19日と、6月29日にかけて実施した。調査は鈴木一有と井口智博が担当した。

**調査の方法** 調査は、グランド部分に2箇所の調査溝、プール跡地に2箇所の調査溝、柔剣道場の周囲に1箇所の調査溝と3箇所の調査坑を設定して行った。各調査区は重機で表土を掘削し、人力で調査溝内の精査を行なながら、遺構と遺物の有無を確認した。

**調査の成果** 調査溝1と2では、グランド整地土の直下で浅黄色砂質土の基盤層を確認し、遺構や遺物は検出できなかった。調査溝3と4では、調査溝3の西端で黄橙色粘質土の基盤層を確認したが、東側及び調査溝4の全域でプールの解体撤去による擾乱が顕著で、遺構や遺物は検出できなかった。

柔剣道場は、作左曲輪の北側に位置し、グランド部分とは9mほどの比高差がある。柔剣道場東側の調査溝5では、茶褐色粘土の直下で、浅黄色砂質土の基盤層を確認しており、遺構や遺物は検出できなかった。また、柔剣道場北側の調査坑1～3では、現地表面から2m以上盛土が施されており、この地点においても遺構や遺物は検出できなかった。

今回の調査の結果、対象地は浜松城跡の範囲内であるが、いずれの地点においても城郭にかかわる遺構は確認できず、遺物も全く出土しなかった。

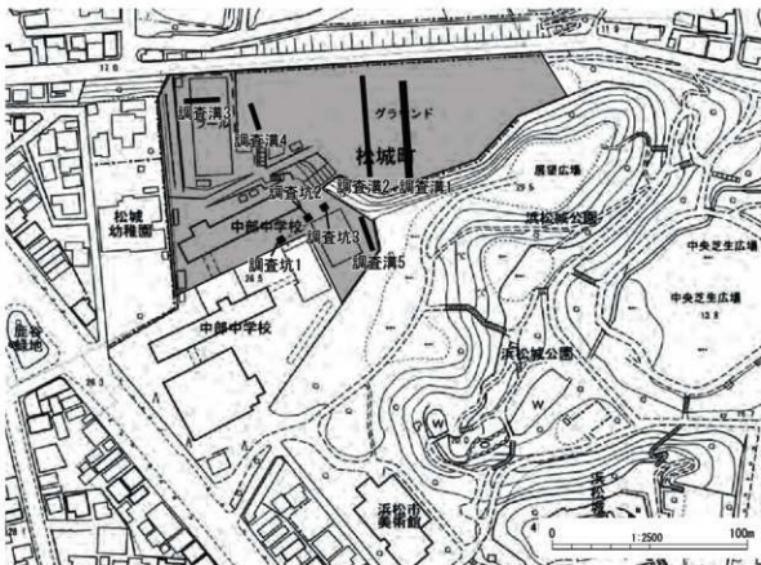
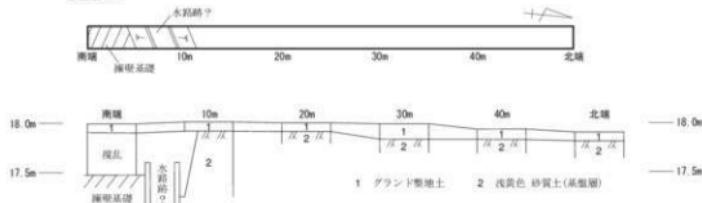
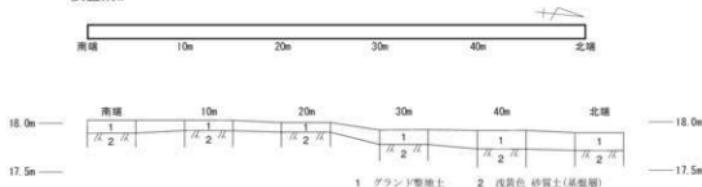


Fig. 7 15次調査区配置図

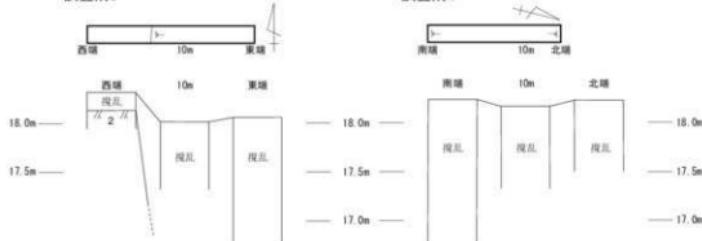
### 調査溝1



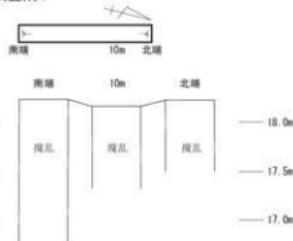
### 調査溝2



### 調査溝3



### 調査溝4



### 調査坑1 調査坑2 調査坑3

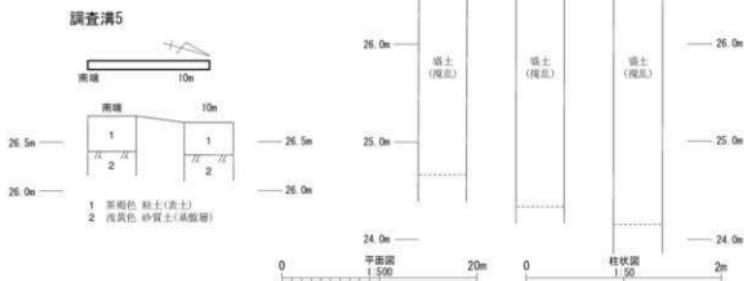


Fig. 8 15次調査実測図

## 6 14次調査の方法と経過

**調査区の設定** 2015年に実施した14次調査では、12次調査に引き続いで浜松城公園の整備に先立ち遺構の残存状況を把握するため、天守曲輪の南側で行った。トレントチは、西端城曲輪の周辺で3箇所(1～3Tr.)、本丸西側から天守曲輪南東側の元城児童公園周辺で3箇所(4～6Tr.)、12次調査において安土桃山期の石垣の残存していることが確認された本丸南側石垣(SL02)で3箇所(7～9Tr.)、本丸南側前面にあたる市役所西別館跡地で1箇所(10Tr.)の、計10箇所を設けた。

**調査方法と経過** 調査の方法は、平垣面では表土、擾乱土等を重機で掘削した後に、人力で地山層まで掘削を行なながら遺構検出を行った。その際、現況の樹木や構造物等は、調査に安全な範囲で現状のまま残した。測量は浜松城公園内の基準点を用い、世界測地系(測地成果2000)に則って行った。土層断面図の作成は、南北方向に主軸をもつトレントチが主であったため、東側長軸と北側又は南側の短軸の2面において実施した。平面図・立面図の作成は、デジタル平板で三次元計測を基本に行い、石垣ではオルソ画像から三次元図を作成し、主要な遺構については詳細図や遺物出土状況図を作成した。遺物の取り上げは、包含層では層位ごとに、遺構では個体ごとに取り上げを行った。写真撮影は、トレントチ又は遺構ごとに、6×7判と35mm判の白黒ネガとカラーリバーサルのフィルムとデジタルカメラによる写真撮影を基本に、主要な遺構についてはローリングタワーを建て4×5判の写真撮影も実施し記録した。

トレントチ調査の進行順序は、1トレントチ→2トレントチ→3トレントチ→5トレントチ→4トレントチ→10トレントチ→8トレントチ→9トレントチ→6トレントチ→7トレントチ、最後に4トレントチの東側への拡張を行ない終了した。

1トレントチでは、天守曲輪埋門下に堀跡(SD01)を検出した。2トレントチでは、天守曲輪と西端城曲輪との間の堀跡(SD02)、戦国期の堀跡(SX01)と時期不明の井戸状遺構(SX02)を検出した。3トレントチでは、天守曲輪と西端城曲輪との間の溝状遺構(SD01・SD02)を検出した。4トレントチでは、天守曲輪南東隅から本丸西側土塁(SL04)と、その上に設けられた登り堀跡西側石垣(SL03)と堀柱跡(推定)を検出した。5トレントチでは、本丸西側土塁(SL04)の南側斜面を検出した。6トレントチでは、本丸西側土塁(SL04)より西側の空堀跡(SD03)を確認するため設定したが、規模が大きく検出できなかった。7トレントチでは、本丸南側石垣(SL02)の西端と本丸西側土塁(SL04)を検出した。8・9トレントチでは、現代の擁壁の裏に封じ込められた本丸南側石垣(SL02)を掘り出し、その存在を明らかにした。東側では歩道等の搅乱が激しく遺構は残存していないかった。10トレントチでは、鉄門南側の空堀跡の検出を目指したが、現代の搅乱が激しく検出できなかった。

なお、調査期間中の7月中旬には奈良大学学長千田嘉博氏が、8月初めには石川県金沢城調査研究所名誉所長北垣聰一郎氏が来訪され、調査成果に対する助言が寄せられた。

**現地説明会** 調査も終盤に近づいた8月22日(土)の晴天日に、本丸南側石垣を中心現地説明会が実施された。約520名もの一般市民の参加があり、関心の高さがうかがえた。



Fig. 9 8Tr. の石垣調査状況



Fig. 10 8/22の現地説明会風景

## 第2章 14次調査の成果

### 1 天守曲輪南側の空堀跡と西端城曲輪の調査

#### (1) 概要

位置 2014年に実施した12次調査7トレンチにおいて、天守曲輪と西端城曲輪の間を掘り切る、空堀跡が検出された。今回の調査はその範囲を明らかにするため、天守曲輪南側の埋門跡への通路斜面に1トレンチを、西端城曲輪の北東側に2トレンチをその南東20m余りに3トレンチを設け、合計3箇所の調査溝を設定した。この堀跡は、中土手を挟む二重堀構造で、今回の14次調査においても12次調査と同じ遺構名称を用い、天守曲輪側をSD01、西端城曲輪側をSD02とした。

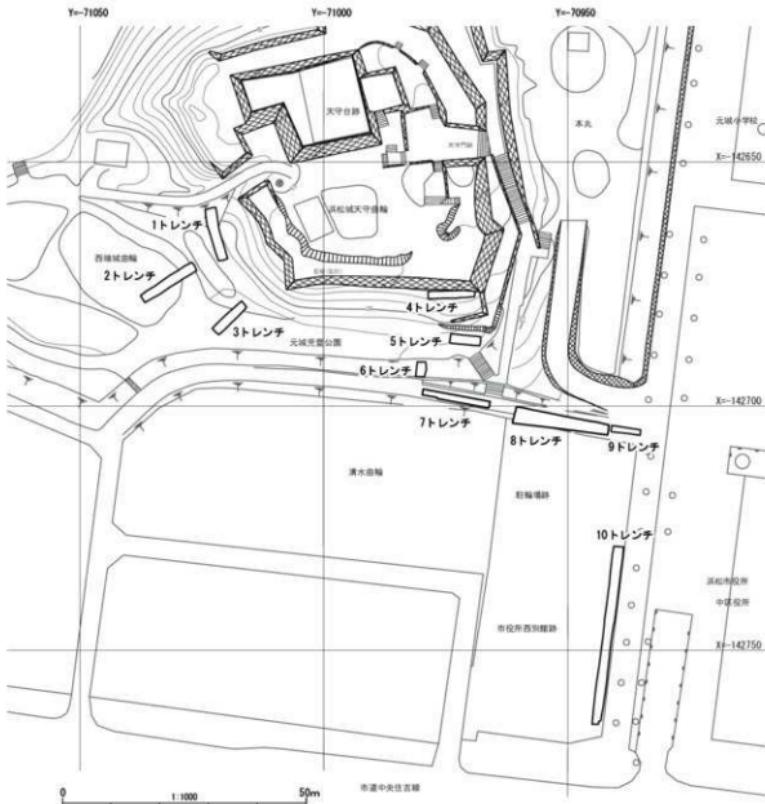


Fig. 11 調査トレンチ配置図

**層位** 西端城曲輪で確認できる基本土層は、上層より1層（現代の最上層の堆積層である表土層）、2層（現代の擾乱層・整地層・埋土層）、3層（近世～近現代の堆積層・埋土層）、4層（戦国期の堆積層・埋土層）、5層（新生代第四期更新世の地山層）に大きく区分することができる。この内、1～3トレンチの5-1層は、多量の円礫を混じえるシルト質細砂～粗砂層で、東鶴江累層上位の三方原礫層と捉えられる。

## （2）1トレンチ検出遺構

**調査の概要** (Fig. 12) 1トレンチは、天守曲輪の西側に開口する埋門跡から西端城曲輪に下りる陸橋状の通路の南側急斜面に設けた、南北方向の延長約10.7mの調査溝である。

調査の結果、トレンチ北側の天守曲輪腰巻土塁裾の急斜面下に、堀跡（SD01）の北岸を形成する地山層（5層）の斜面を確認した。トレンチ北半の堀底は、掘削深度が深かつたため、重機による深掘り調査で確認した。また、トレンチ南半はトレンチ中央部を横断する水道管が埋設されていたこと、南半がさらに堀跡の深い部分に当たることが予想されたので、完掘していない。

**堀跡（SD01）** (Fig. 12) 検出したSD01の北岸は、トレンチ北側断面の下部にその斜面の一部である地山層（5層）を検出したもので、土塁や土橋状の通路を確認したものではない。この地山層の

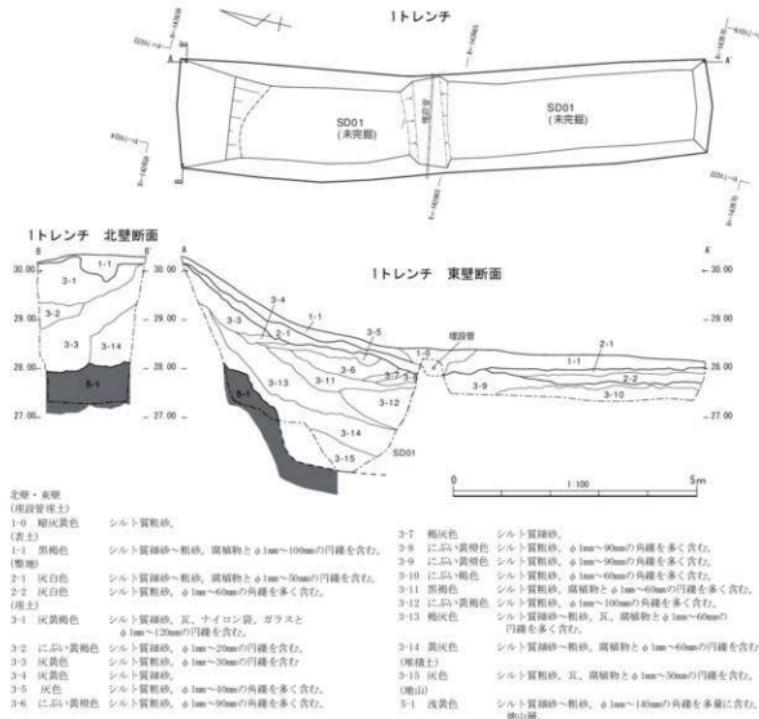


Fig. 12 1トレンチ実測図

斜面の変化を等高線等で詳細にみると、トレンチ北側が通路に平行な傾斜であるのに対し、トレンチ東側へは腰巻土壌上端の延長線上に平行な傾斜となっていて、このトレンチ北側周辺部が傾斜面の変換点となっているようである。

SD01の規模は、深掘り調査で確認した堀底の高さの一点が標高25.9 mであった以外は、明確にし得なかった。この堀跡への斜面勾配は、北側斜面で43度余りの急傾斜であったものが、最後の1m余りは更に約78度もの急傾斜で堀底に落ち込む。12次調査7トレンチでのSD01の規模は、上幅が約4 m、深さは約2 m（堀底標高26.0 m）、底幅は1.55～1.7 mであった。腰巻土壌側斜面の勾配は、約58～62度と推定され、中土手側は約35度であった。

SD01の埋土には、現代の表土層（1-1層）及び整地層（2-1・2層）の下に、3-1～14層のシルト質細砂～粗砂に礫を多量に含む埋土層が見られた。この埋土層は、断面の堆積状況から、全て天守曲輪側である北東側から入り込んでおり、現況の平場を作るための公園造成工事による埋め立て層と考えられる。3-15層は地山層（5層）の上に堆積するシルト質粗砂に腐食物と礫を含む層で、SD01の堆積物と考えられる。

**遺物出土状況** (Fig. 16) 出土遺物には埋土層（3-1～14層）を中心に、近世～近現代の陶磁器や須恵器壺（1）と、繋ぎ九つ目結い紋軒丸瓦（2）、巴紋軒丸瓦（3～6）、巴紋軒棟瓦（7）、唐草紋軒平瓦（9～11）、平瓦（12）、熨斗瓦（13）等の多量の瓦が出土した。また、堆積層3-15層からは、唐草紋軒平瓦（8）が出土した。

### （3）2トレンチ検出遺構

**調査の概要** (Fig. 13・14) 2トレンチは、天守曲輪石垣天端から約8.5 m下にある西端城曲輪の北東側平坦面に設けた。当初は堀跡を確認する北東方向の延長約8 mの調査溝であったが、南西端に遺構（SX01）を検出したため南西に延長し、延長約12.5 mの調査溝とした。

調査の結果、トレンチの北東端に堀跡（SD02）の南西岸と、西端城曲輪内に溝状遺構（SX01）と井戸状遺構（SX02）を確認した。西端城曲輪における堀跡以外の遺構発見は、これが初例である。遺構が検出された西端城曲輪内の遺構検出面の高さは、標高28.0～28.1 mで、僅かに南西側が高い。また、SX01は遺構を完掘したが、SX02はこれ以上の拡張が困難であったため、敢えて完掘していない。なお、堀跡（SD02）の堀底は、堀跡の上部に水道管が埋設されていたこと、掘削深度が深かつたことから、重機による深掘り調査で確認した。

**堀跡（SD02）** (Fig. 13) 天守曲輪をめぐる二重の堀跡（SD01・02）の内、外側の北北西方向の堀跡（SD02）の南西岸を検出した。

SD02は、南西岸の凡その角度がN9°Wで、上幅は3.2 m以上であった。西端城曲輪側の斜面は、約16度の緩い斜面が約2.4 m続き、ここから12次調査で確認した傾斜（約55度）と同様な約56度の急激な傾斜となって堀底にいたる。その深さは1層及び2層下の堀上端（標高28.03 m）から、深堀調査で確認した最深部堀底（標高25.38 m）までの2.65 mであるが、さらに深い可能性が高い。12次調査で確認したSD02の規模は、上幅が6.42 m、深さは中土手側が0.77 m、西端城曲輪側が2.02 m、底幅は3.05 mであった。12次調査で確認した部分と比べて岸部の緩い傾斜部分が残っていることや堀の深さが深いのは、5層上面が西側ほど高く当初の高さを良く残していることと、堀底自体も僅かに西側が深いためではないかと思われる。

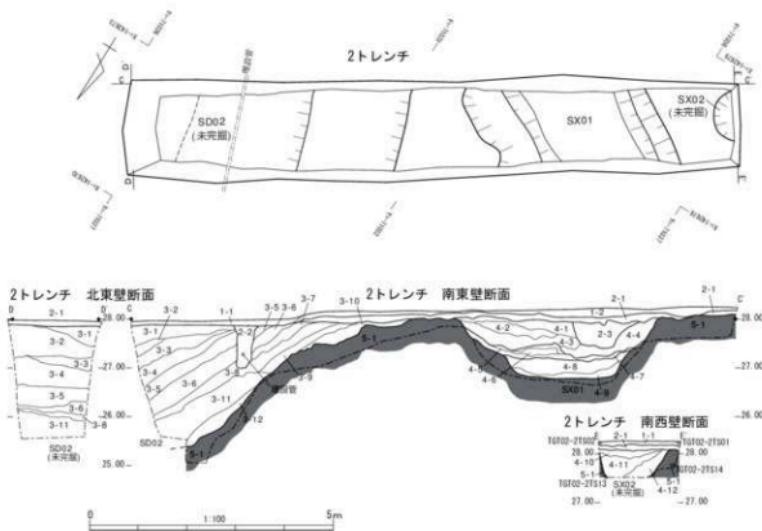
SD02の埋土には、整地層（1-1・2層、2-1層）の下に3-1～12層のシルト質細砂～粗砂に円礫を多量に含む埋め立て層が見られた。この埋め立て層は西端城曲輪側である南西～西側の方向から埋め

られており、現況の平場を作るための造成工事によるものと考えられる。

**SD02遺物出土状況** 出土遺物には埋土層(3-1～12層)から、近世～近現代の陶磁器や多量の瓦がある。

**溝状遺構(SX01)** (Fig. 13・14) SD02の南西0.9～1.3mに、トレンチを西北西方に向かって斜めに横切る溝状の遺構を検出した。断面及び平面形状からは、溝または堀と判断されるが、約4m南東の12次調査7トレンチにおいて検出されておらず、土坑の可能性もあることからSXとする。

SX01は、凡そN57°Wに主軸を持つ、上幅3.27～3.53m、底幅1.9～2.1m、その深さは北東の上端(標高28.02m)から最深部堀底(標高26.77m)までの1.25mである。断面の形状は、堆



#### (表土)

- 1-1 灰黄色 シルト質細砂。φ1mm～50mmの円錐混じる。
- 1-2 黄褐色 シルト質細砂～粗砂。φ1mm～100mmの円錐を含む。
- (埋土層)
- 2-1 灰褐色 シルト質細砂～粗砂。φ1mm～50mmの円錐を多く含む。
- (埋土層)
- 2-2 灰色 シルト質粗砂。円錐混じる。
- (埋土層)
- 2-3 灰褐色 シルト質粗砂。シルト(2.5Y7/4)のブロックとφ1mm～20mmの円錐を含む。

#### (SD02埋土)

- 3-1 にふい黄褐色 シルト質細砂。φ1mm～30mmの円錐混じる。
- 3-2 にふい黄褐色 シルト質細砂～無砂。φ1mm～10mmの円錐混じる。
- 3-3 灰褐色 シルト質細砂。φ1mm～10mmの円錐混じる。
- 3-4 灰黄色度 シルト質細砂。φ1mm～10mmの円錐を僅かに含む。
- 3-5 オリーブ黄色 シルト質細砂。
- 3-6 にふい黄色 シルト質細砂。
- 3-7 にふい褐色 シルト質細砂。
- 3-8 灰オリーブ色 シルト質粗砂。φ1mm～60mmの円錐を多数含む。
- 3-9 黄褐色 シルト質粗砂。φ1mm～120mmの円錐を含む。
- 3-10 にふい黄褐色 シルト質粗砂。φ1mm～50mmの円錐混じる。
- 3-11 灰オリーブ色 シルト質細砂。φ1mm～50mmの円錐を含む。
- 3-12 灰黄色 シルト質粗砂。φ1mm～30mmの円錐を多量に含む。

#### (SX01堆土)

- 4-1 にふい黄褐色 シルト質細砂。φ1mm～40mmの円錐を含む。
- 4-2 にふい黄褐色 シルト質細砂。φ1mm～50mmの円錐を含む。
- 4-3 にふい黄褐色 シルト質細砂～中砂。φ1mm～90mmの円錐を多く含む。
- 4-4 灰褐色 シルト質細砂。腐植物とφ1mm～80mmの円錐を含む。
- 4-5 黒褐色 シルト質細砂。腐化物とφ1mm～90mmの円錐を多く含む。
- 4-6 灰黄褐色 シルト質細砂。φ1mm～60mmの円錐を含む。
- 4-7 黑褐色 シルト質細砂。腐化物、灰とφ1mm～20mmの円錐を多量に含む。
- 4-8 にふい黄褐色 シルト質細砂。φ1mm～220mmの円錐を含む。
- 4-9 灰褐色 シルト質細砂。φ1mm～60mmの円錐を含む。

#### (SD02堆土)

- 4-10 にふい黄褐色 シルト質細砂。φ1mm～40mmの円錐を多く含む。
- 4-11 灰褐色 シルト質細砂。φ1mm～60mmの円錐を多量に含む。
- 4-12 にふい黄褐色 シルト質細砂。φ1mm～20mmの円錐を僅かに含む。

#### (地山)

- 5-1 オリーブ黄色 シルト質粗砂。φ1mm～100mmの円錐を含む。地山層。

Fig. 13 2トレンチ実測図

積層の中位で逆台形を二段に重ねた形で、両側面の斜面中位に平らな段が生じている。城内の造構に足掛りを設けるとは考え難いため、拡張による堀り直しがあったものと考えられる。两岸の斜面勾配は、北東岸の両斜面が約61度、南西岸の両斜面も59～60度ではほぼ同じであった。造構底の傾斜は、僅かに南東側に傾斜している。

SX01の堆積層は、整地層(2-1層)の下に、4-1～9層のシルト質細砂に円礫を含む層がみられた。これらの層は、大きく上中下層の3層に大別することが出来る。下層の4-8・9層は、断面逆台形の上幅2.4～2.6m、底幅1.9～2.1m、深さ約0.4mの下段の堆積層で、4-9層は最下層の薄い自然堆積層、4-8層は大きな円礫を含む厚い堆積層である。上層からの掘り込みはみられない。中層である4-5～7層は、断面逆台形の上幅3.27～3.53m、底幅2.1～2.6m、深さ約0.85mの上段の堆積層で、炭化物を含まない4-6層を炭化物(炭・灰・焼けた木片等)や遺物を多く含む上層の4-5層と下層の4-7層が挟む。上層の4-1～4層は、円礫を多く含む埋土層で、下層の4-4層は南西側から、他の4-1～3層は北東側から埋められていた。

**SK01遺物出土状況** (Fig. 14, PL. 3) 遺物が出土したのは、下層上部の4~8層と中層の4~5・7層からで、上層からの遺物の出土は無い。下層の4~8層からは、須恵器の壺蓋(14)・壺(15・16)、土師器の把手付鉢(17)・かわらけ(23)・羽付鍋(24)、古瀬戸の灰釉軸折皿(18)・擂鉢(19)、銅

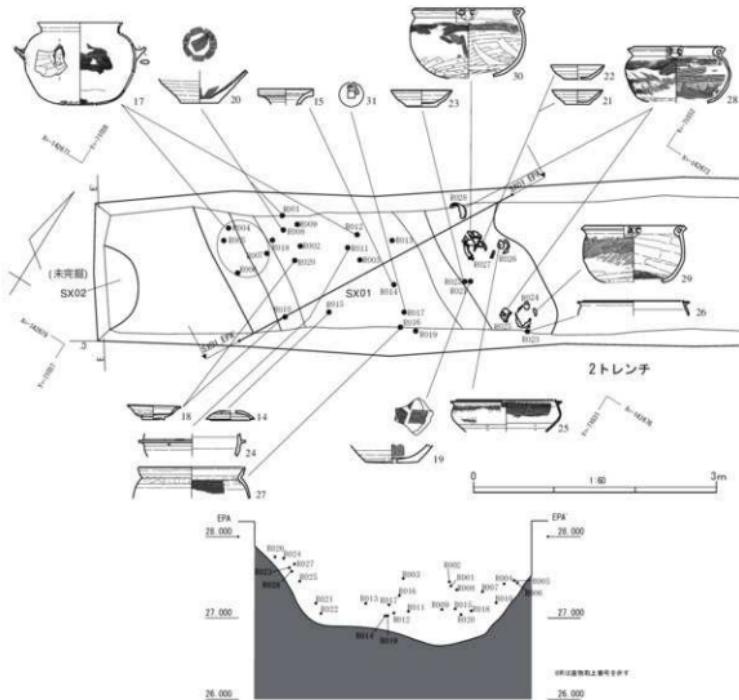


Fig. 14 2トレンチSX01遺物出土状況図及びエレベーション図

銭「政和通宝」(31)、巻貝のアカニシ2個(32・33、PL. 14-32・33)が出土している。中層の4-7層からは、古瀬戸の擂鉢(20)、土師器の内彎形内耳鍋(27)・内彎形羽釜(25・26)・くの字形内耳鍋(28~30)・かわらけ(21・22)等が出土した。このうち北東岸の斜面には、巻頭図版6-3の様に完全に近いくの字形内耳鍋(29・30)・内彎形羽釜(25)や、二つに大きく分かれたくの字形内耳鍋(28)、重なったかわらけ(21・22)が、押し潰された状態で出土した。

**井戸状遺構(SX02)** (Fig. 13) SX01の南西約0.9mにあって、2トレンチ南端にあり半分以上がトレンチ外に存在する井戸状の遺構を検出した。

SX02の規模は、南西壁面にかかる部分が1.48m、奥行き0.41m以上の半円形で、0.58m余り掘り下げたが、それ以下への掘り下げは行っていない。現状では素掘りである。

SX02の堆積層は、掘り込んだ4-10~12層の3層以上で、シルト質細砂に円礫を含むSX01上層とよく似た堆積層であり、SX01と同時期の埋土層と考えられる。

**SX02遺物出土状況** 出土遺物には、4-10層より摩滅した時期不明の土師器小片が1点出土した。

#### (4) 3トレンチ検出遺構

**調査の概要** (Fig. 15) 3トレンチは、2トレンチと共に堀跡(SD02)の南西岸を確認するために設けた、延長約8mの調査溝である。

西端城曲輪側の遺構検出面の高さは整地層下の標高27.44mで、トレンチ南西壁面下に南西岸を検出した。このトレンチ南西壁の位置は、現況では南東にも南西にも3m余りで急な崖面となっている所である。12次調査で検出した中土手を検出することはできなかったが、西端城曲輪の西端がほぼ明らかとなった。なお、堀跡(SD02)の堀底は、堀跡の上部に水道管が埋設されていたこと、掘削深度が深かつたこと、雨水による崩落がみられたことなどから、重機による深掘り調査は実施できなかつた。

**堀跡(SD02)** (Fig. 15) 2トレンチ同様に天守曲輪をめぐる二重の堀跡(SD01・02)の内、外側の北北西方向に延びるSD02の南西岸を検出した。

SD02の方向は、南西岸の角度が南西壁面の等高線等の状況からN38°W前後と考えられる。現状の上幅は約8m以上、深さは2.2m(掘削底標高25.32m)以上である。南西岸肩部から斜面の勾配は、岸側に内彎するため28度余りから70度もの急勾配となる。12次調査では、堀跡全体(SD01・02)の上幅が13.42m、SD02の上幅が6.42m、深さはSD02下の最深部で約2.2m(標高25.80m)であった。溝底は既に12次調査よりも0.5m以上下がっており、さらに深いことが予想された。

SD02の埋土には、整地層(2-3~6層)の下に3-1~14層のシルト質細砂~粗砂に円礫や角礫を含む埋土層が見られた。この層は2トレンチ同様、西端城曲輪側である南西~西側方向から埋められており、現況の平場を作るための造成工事によるものと考えられる。しかし、北東岸斜面の3-15層は、腐食物に円礫を含むシルト質粗砂で、堆積層と考えられるものであった。3-15層から遺物は出土しなかつた。

**遺物出土状況** (Fig. 18) 出土遺物には埋土層(3-1~14層)から、近世~近現代の陶磁器や平瓦(34・35)、飾り瓦(36)等の多量の瓦が出土した。

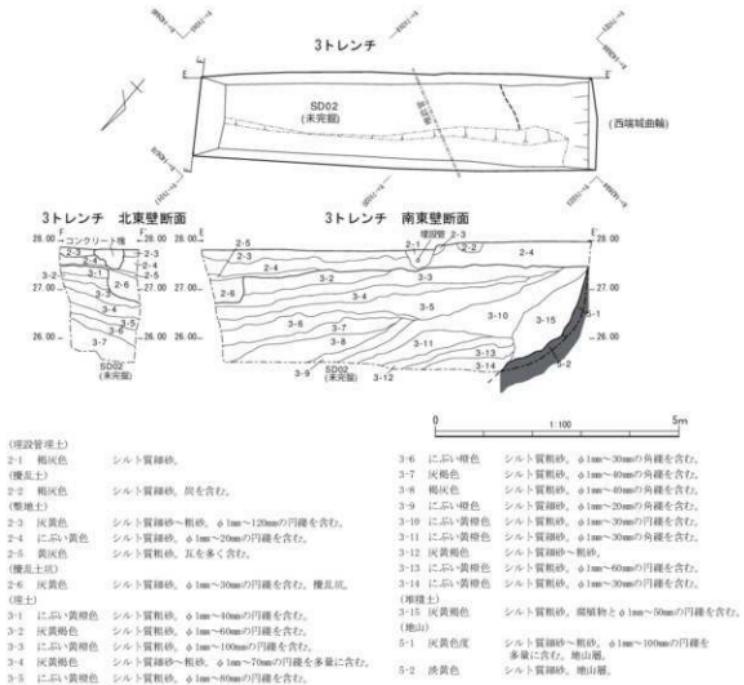


Fig. 15 | 3トレンチ実測図

## (5) 出土遺物

1トレンチ出土遺物 (Fig. 16) 1は3層から出土した8世紀前葉の須恵器壺で、低い貼り付け高台を付ける。城郭に伴うものではないが、浜松城跡では古代の遺物が広範囲に出土している。

2～6は、3層出土の軒丸瓦である。2は繋ぎ九つ目結い紋の軒丸瓦で、本庄(松平)氏在城期(1702～1729年、1749～1758年)のものと考えられる。3～5は連珠左巻巴紋の軒丸瓦で、3は巴の尾が接して圓線となるもの、4・5は連珠と巴紋の間に圓線が巡らないものである。6は連珠をもたない左巻巴紋で、小形で瓦当厚が薄いことから飾り瓦の一部である可能性がある。7は3層から出土した軒桿瓦丸瓦部で、巴頭部の大きい左巻三巴紋である。瓦当径は8.2 cmである。

8～11は、軒平瓦である。8は3-15層から出土した五葉紋の下上2反転均整唐草紋である。中心飾りは点珠に劍菱形の中央と、先端が外に屈曲する脇、への字状の萼が各2単位によって構成される。唐草は単線で、巻き込み先端に丸みをおびる。9・10は、3層から出土した三葉紋の下上2反転均整唐草紋である。9の中心飾りは点珠に先端が膨らむ中央と、脇に十文字状の子葉がはさんだ形態である。唐草は重線で、外線は巻き込みが深く、内線は浅い。上弦幅は20.3 cm、瓦当厚4.4 cmである。10は9と同じ紋様構成であるが、中心飾りは点珠に達磨状の中央と子葉からなり、唐草も丸みを帯び直線的となり肥大化している。11は3層出土の右周縁近くの破片で、単線か重線の唐草

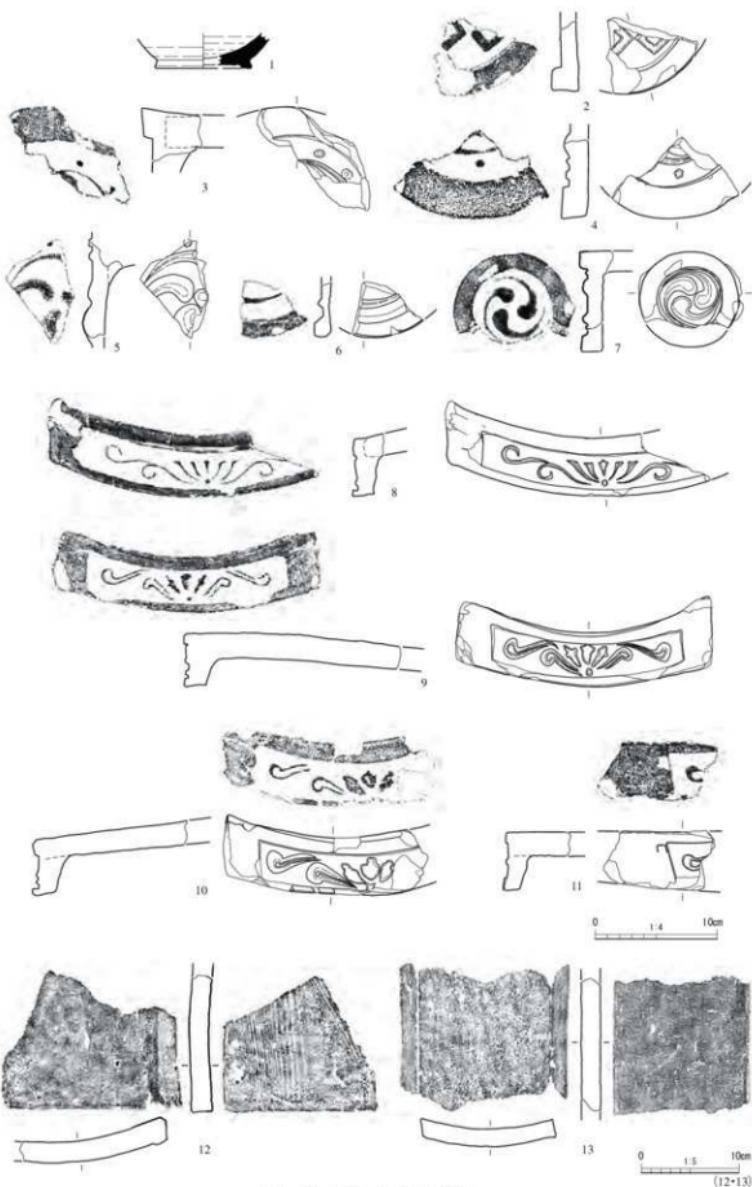


Fig. 16-1 トレンチ出土遺物

紋が残る。

12は3層出土の平瓦で、凸面に縦方向のハケ(板ナデ)調整がみられる。13は3層出土の熨斗瓦で、幅13.6cm、厚さ2.0cmである。

2 トレンチ出土遺物 (Fig. 17) 14～31はSX01の出土遺物で、20～22・25～30は中層下部の4-7層から、14～19・23・24・31は下層上部の4-8層から出土した。このうち14～17は、古代の遺物である。14は須恵器の坏蓋か有蓋長頸壺の蓋で、僅かに擦み痕を残す。15・16は須恵器の長頸壺の口縁部と胴部である。17は土師器の把手付鉢である。14は7世紀末、15・16は8世紀初、17

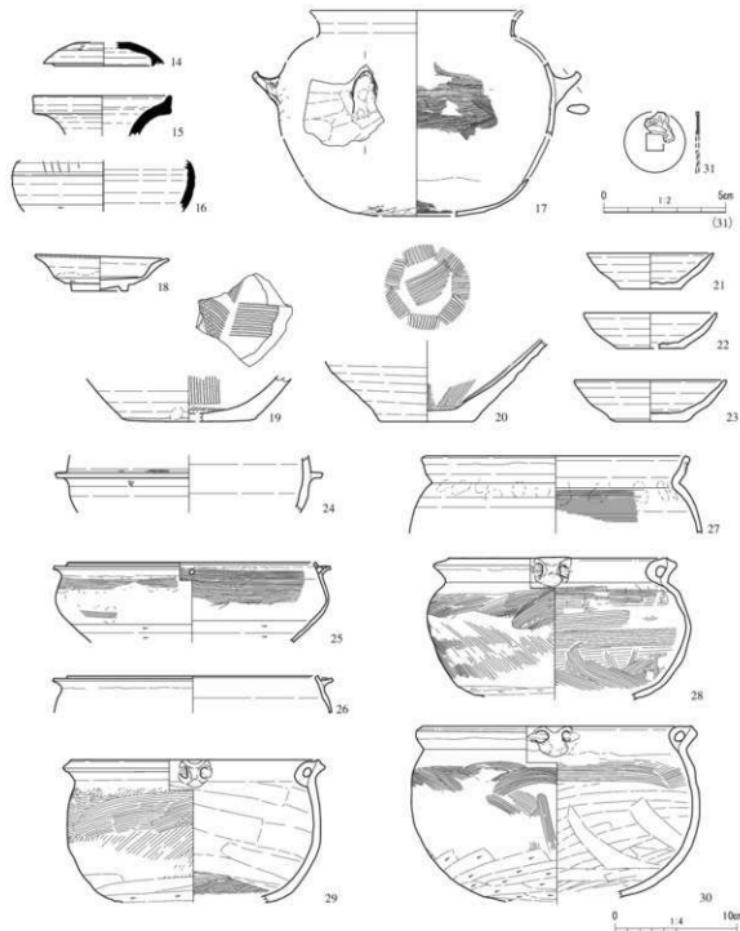


Fig. 17 2 トレンチ出土遺物

も7世紀末～8世紀初頃のものとみられる。

18は瀬戸美濃産の灰釉腰折れ皿で、口径10.9cm、器高3.0cm、内面と外面上部に緑灰色の灰釉をかける。19・20は瀬戸美濃産の擂鉢底部で、内面と見込みに分けて攝り目が施され、外面に鉄釉(泥漿)をかける。18～20は、いずれも古瀬戸後期IV新段階(15世紀後葉)に位置づけられる。

21～23は、土師器のロクロ成形による浅黄橙色のかわらけである。口径と器高は、21が10.4cmと2.9cm、22が11.0cmと2.9cm、23が12.4cmと3.4cmである。

24～30は土師器の煮沸具である。24は羽付鍋の鋸部で、鋸は突出が短く厚手である。25・26は内湾形羽釜で、器壁は薄く口縁は鋸から短く内傾し端面をつくる。25には鋸上部の口縁部に穿孔がみられる。口径は25が20.4cm、26が20.6cmである。27は内湾形内耳鍋である。調整は体部外面が指オサエ、内面が横ハケと指ナデである。口径は21.2cmである。28～30はくの字形内耳鍋である。外面調整は、体部外面をハケで、底部はどれもヘラケズリであるが、29・30は体部中位までヘラケズリを施す。内面調整は、28では底部までハケが残るが、29では底部に30では頸部下にハケを一部残すがナデ調整とする。口径は28が17.8cm、29が20.3cm、30が22.0cmである。

この他に4～8層から、銅貨と巻貝が出土している。31は北宋錢で、初鑄が政和元年(1111年)の「政和通宝」の破片である。32・33は巻貝のアカニシで、2個体分(PL. 14-32・33)がある。

この18～30の遺物は、古瀬戸や土師器の年代から、15世紀後葉頃のものと捉えられる。

**3 トレンチ出土遺物** (Fig. 18) 34～36は、3層から出土した。34・35は平瓦で、凸面に縦方向のハケ(板ナデ)調整を行う。36は飾り瓦の一部と考えられる。

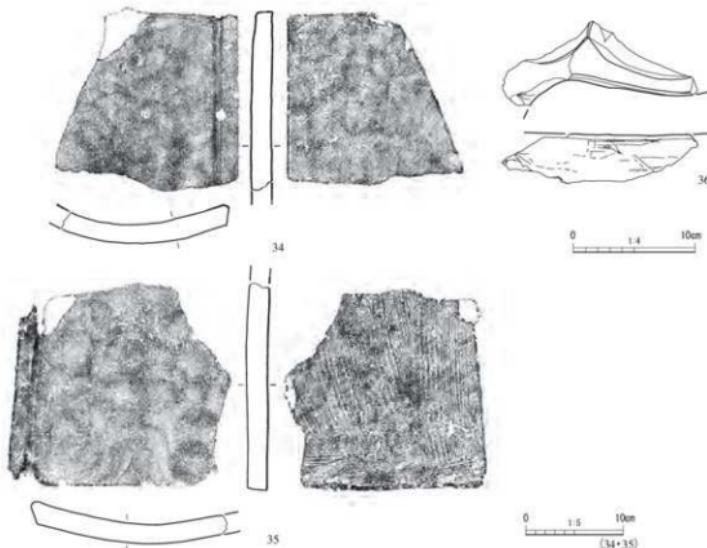


Fig. 18 3 トレンチ出土遺物

## (6) 小 結

1 トレンチは、天守曲輪の埋門跡から西端城曲輪に下りる土橋状の通路の南側急斜面下に設けたもので、北壁の斜面に石垣は検出されなかった。天守曲輪の石垣は鉢巻部分のみに設けられ、腰巻部分は土壁で、直接堀に接することが再度確認できた。また、北壁下に地山層（5層）が検出されたことで、土橋状の通路が当初より存在し、通路の北西には貫通してはいなかつた可能性が高くなつた。但し今回の検出はその一部であったので、さらなる検証が必要である。また、これまで空堀の埋土は、西端城曲輪側から埋められたことが判明していたが、ここでは埋門側からも埋め立てが行われていたことを確認した。

2 トレンチでは二重堀の外側の堀跡（SD02）の南西岸と、西端城曲輪内で初めて遺構（SX01・SX02）を検出した。SD02の南西岸は、12次調査7トレンチから、55度もの急傾斜で落ち込むものと考えていた。今回も同様な56度の急傾斜が確認できたが、その南西側に緩い16度の緩斜面も存在していたことが明らかになった。

SX02の南西側において、溝状遺構SX01を検出した。SX01は断面形状が逆台形を二段に重ねた形状で、拡張による掘り直しが行われたものと考えられる。拡張は下層遺構が堆積後に上部を一回り大きく掘っていて、下層の埋まつた部分を新たに掘り直した形跡はみられなかつた。中層堆積物は、拡張直後の最初の堆積物で、炭化物（炭・灰・焼けた木片等）や遺物を多量に含み、内耳鍋、かわらけ、羽釜等が北東岸の斜面に纏まつて捨てられたような状態で出土した。北もしくは北東方向から、何らかの理由で炭や灰と一緒に一括して廃棄した可能性が考えられる。上層は埋土層で、井戸状遺構SX02と共にその周辺の同時期の遺構が埋められたことを示すものである。この様に、中層と上層が同時期か、余り時間が経過していない可能性が高く、拡張直後に4-7層が堆積していくことを考慮するなら、下層の4-8層も近い時期の堆積物である可能性を示すものと推測される。出土した遺物は2群に分かれる。4-8層内の7世紀末～8世紀初頃の須恵器の坏蓋・長頸壺や土師器の把手付鉢等の遺物群は、これまで散発的に城内から出土する、古墳や横穴の遺物が築城に伴う掘削や造成工事で破壊され紛れ込んだものと考えられる。他の4-7～8層内の15世紀後葉の土師器の内彎形内耳鍋・内彎形羽釜・ぐの字形内耳鍋・かわらけ、古瀬戸の灰釉腰折皿・播鉢等の遺物群は、その器種に煮沸などの調理に係るものが多くを占め、アカニシもその一つとみられる。このことから、SX01の近隣に調理場的な施設があつた可能性を推測することができる。その位置については、その遺物の廃棄された方向から、SX01北東側の天守曲輪下に存在したものと思われる。

SX02は、平面が半円形であるため、井戸状の遺構と捉えられる。三方原疊層と東鶴江累層の境界には、比較的多くの伏流水が流れている。その境界は8トレンチ周辺で標高19 m前後であったので、SX02検出面である標高28.0 mからは、比高差が約9 m（5間）ある。井戸であれば、相当深いものとなる可能性が高い。また、調理場的な施設が存在するならば水は必要不可欠なものであり、清水曲輪周辺の湧水地から運ぶか、井戸は欠かせない施設であることは言うまでもない。

このように、徳川家康が浜松城を築城する元亀元年（1570）より以前の遺構が検出された意義は極めて大きい。

3 トレンチでは、中土手は確認できなかつたが、SD01とSD02が一つとなつた堀跡を検出した。12次調査7トレンチにおいて確認した堀の上幅は13.42 m、最深部の深さは2.2 mであった。今回の調査箇所においても上幅は13.5～14.0 mで、堀底の深さは2.2 m（標高25.32 m）以上である。中土手もみられないことから、東側の広い堀跡（SD03）に一本の堀として斜めに繋がっていたか、

3 トレンチの東側で一旦途切れて崖面を形成していたか、どちらかの可能性がある。

## 2 本丸西側の土壘と登り堀の調査

### (1) 概要

**位置** 天守曲輪石垣（SL01）の南東隅から本丸南側石垣（SL02）に至る本丸西側土壘（SL04）とその上に作られた登り堀跡（SL03）を明らかにするため、天守曲輪石垣（SL01）南東隅の南側下に4トレンチを、本丸西側土壘（SL04）南側延長上にある元城児童公園内に5トレンチを、さらに堀跡（SD03）の南岸や堀底を確認するために元城児童公園下斜面に6トレンチを、本丸南側石垣（SL02）と本丸西側土壘（SL04）の取り付きをみるために歩道上に7トレンチを設け、合計4箇所の調査溝を設定した。

**層位** 本丸西側で確認できる基本土層は、上層より1層（現代の最上層の堆積層である表土層・アスファルト層・コンクリート層・碎石整地層）、2層（現代の搅乱層・整地層・埋土層）、3層（近世～近現代の堆積層・埋土層）、4層（戦国期の堆積層・裏込石層・埋土層）、5層（新生代第四期更新世の地山層）に大きく区分することができる。この内、5・7トレンチの5-1・2層は、円礫を混じえるシルト質細砂～粗砂層やシルト質極細砂で、東鴨江累層上位の三方原疊層と捉えられる。

### (2) 4トレンチ検出遺構

**調査の概要** (Fig. 19・20) 4トレンチは、本丸西側土壘（SL04）を確認するために、天守曲輪石垣（SL01）南東隅部の南側石垣下に設けた、延長約6.5mの東西方向の調査溝であったが、登り堀跡西側石垣（SL03）を確認したため、さらに東側に3m拡張し、総延長9.5mの調査溝とした。

天守曲輪石垣（SL01）南東隅部には、Fig. 19の現況図のように南南西方向に延びる幅7～9m、長さ7m余りの土壘の痕跡が残り、東側と南側は切り土面を新しい石積で保護されている。

調査の結果、本丸西側土壘（SL04）の上に登り堀跡西側石垣（SL03）を確認したが、東側の石垣は確認できなかった。その後、天守曲輪石垣（SL01）との接合部を深堀して、根石を確認した。

**登り堀跡西側石垣（SL03）** (Fig. 19・20) 1-1・2層を除去した段階で、西側に石面をもつ石垣列とその前面である西側の3-1層上面に、Fig. 19のように多量の堀瓦が散乱している状態で検出された。恐らく登り堀が倒壊したか撤去された後の状態を示しているものと考えられる。その後、天守曲輪石垣（SL01）と登り堀跡西側石垣（SL03）の根石を埋める4-7層上面まで調査を行った。

検出したSL03の規模は、トレンチ幅の1.66mで、高さは4-7層に埋まっている状態で石垣残存高が約0.7m、根石底からの石垣残存高は0.84m余りである。石垣は珪岩の自然石を主に野面積したもので、平積の7段余りが残る。根石は標高31.3mの上面に高さ0.2m余りの石材を横並びに置き並べ、その上に最大で長さ0.48m×高さ0.22m、平均的には長さ0.3m×高さ0.1m×奥行き0.2m余りの小振りな石材を多用して天守曲輪石垣（SL01）に接して積み上げている。12次調査8-1トレンチの天守曲輪石垣（SL01）根石底の高さは標高30.84mであったので、ここでもこれに近い深さに根石は設置されていると考えられる。なお、残存する石積みの最上段には、丸瓦2点が石面に合わせて横並びに伏せられており、裏込めの排水施設を造っていた可能性が考えられる。石垣主軸は、N19°Wである。北側の天守曲輪石垣（SL01）の主軸がN89°W前後であるから70度余り異なる。石垣の勾配（矩）は、約15度で積まれていた。このSL03に対する東側の石垣は、残存する遺構の痕跡がないが、土堀とするならば少なくとも数段の石積みが存在したものと考えられる。

**SL03遺物出土状況** (Fig. 19・25) 出土遺物には、SL03西側の1・2層から出土した堀瓦（38～40）などの多数の瓦と近現代の陶磁器がある。

柱穴 (SP01・02) (Fig. 20) SL03と直接係わるか不明ではあるが、2基の柱穴を検出した。SL01側のSP01は、SL03地付面の石面より1.2 m奥に柱芯がある柱穴で、直径0.53～0.75 mの楕円形掘方に、残存深0.45 m余りを掘り、直径0.17 m余りの丸柱を据えたものである。SP02は、SP01柱芯から南東に1.02 mのところで検出した。地付面の石面よりSP01と同じ1.2 m奥に柱芯がある柱穴で、直径0.55～0.62 mの楕円形掘方に、残存深0.52 m余りを掘り、直径0.16 m余りの丸柱を据える。堆積層も同じ4-1～3層であり、同時期の柱穴と考えられる。主軸はN15°W前後であるが、SL03と同時の遺構であると解すると、石垣の高さが高い場合は土塀の親柱とも考えられるが、石垣が低い場合は板塀または骨組みのある土塀の控え柱である可能性が高い。

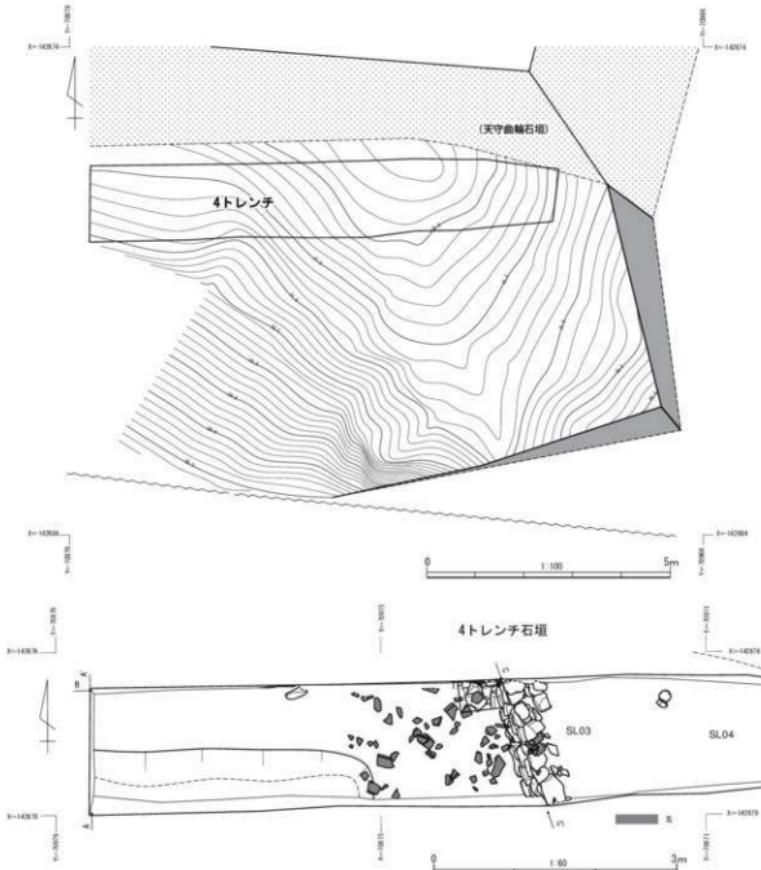


Fig. 19 4トレンチの現況図及び3-1層上面遺物出土状況図

**土壙跡（SL04）(Fig. 20)** 登り堀跡西側石垣（SL03）の下には、盛土層（4-4～5層以上）からなるSL04があり、本丸の西側を成していた。残存する構造の規模は、東側や南側を改変されているため明確ではないが、幅7m以上と考えられる。この盛土層内には、多くの瓦と僅かに土器が含まれていて、当初の土壙でないことは明らかである。

**SL04遺物出土状況 (Fig. 25・26)** 出土遺物には、盛土層（4-4層）から出土した土師器のかわらけ（40）と、盛土層（4-4・5層）から巴紋軒丸瓦（41～43）、堀瓦の可能性のある無段式丸瓦（44）、丸瓦（45～47）等の瓦が出土している。

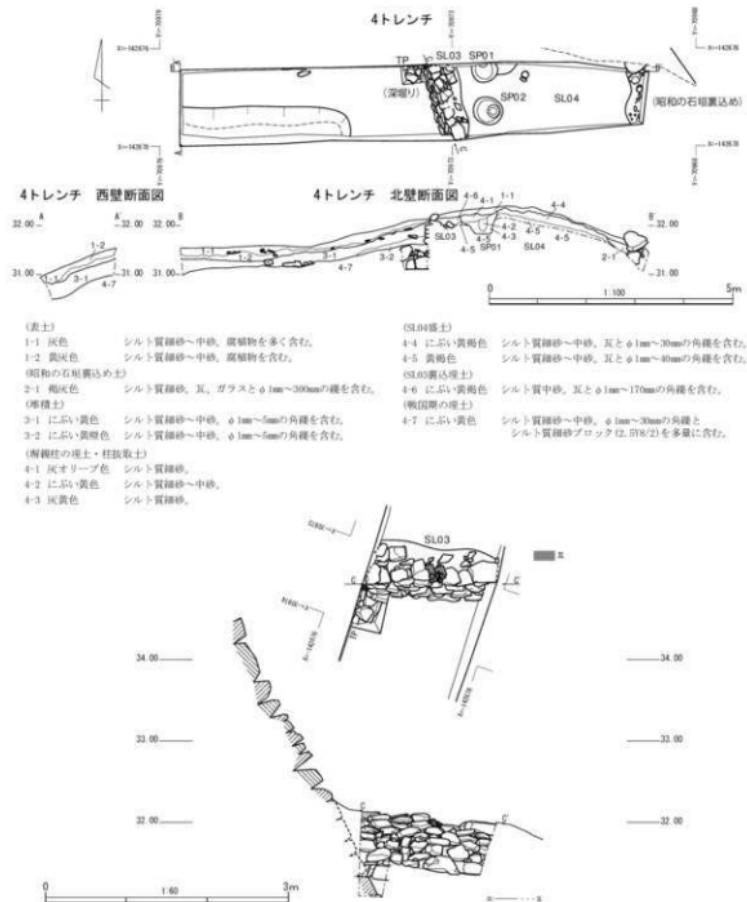


Fig. 20 4トレンチ実測図及びSL03詳細図

### (3) 5トレンチ検出遺構

調査の概要 (Fig. 21) 5トレンチは、本丸西側土塁 (SL04) を確認するために、元城児童公園砂場の東側に設けた、延長約6.1 mの東西方向の調査溝である。

調査の結果、本丸西側土塁 (SL04) と、これを埋める埋土層を検出した。なお、本丸西側土塁 (SL04) 西端については、当初は砂場を壊して土塁跡の位置を確認する計画であったが、砂場が防火水槽を転用した強固で大きなコンクリート構造物であったため、西側への拡張が困難であったこと、掘削深度が深かったことなどから確認が行えなかった。

**土塁跡 (SL04)** (Fig. 21) 12次調査で砂場西側の平場に設けた8-3トレンチは、規模の大きい堀跡 (SD03) 内に設定したため、地山層は確認できなかった。今回の5トレンチでは、トレンチの北東端を最高所とする南側へ約34度、西側へ約22度の傾斜で下がる盛土層 (4-1-3層) とその下の地山層 (5-1・2層) を検出した。この4層と5層は、6トレンチでこの層が検出されなかったことを考えるならば、この部分が土塁跡 (SL04) 上であることを確認することができる。SL04の幅は、トレンチ底幅からいうならば3.3 m以上である。5トレンチの北東隅部の盛土層最上部は、斜面の途

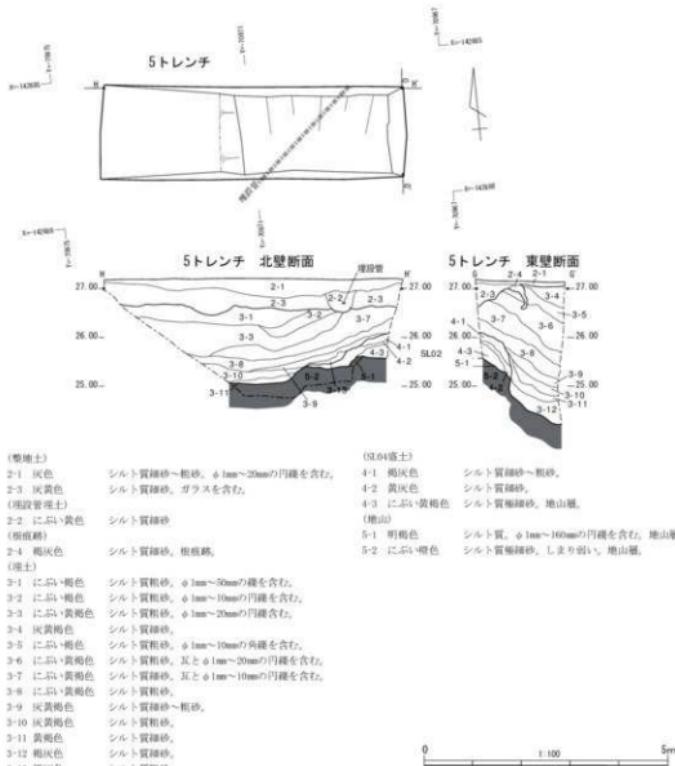


Fig. 21 5トレンチ実測図

中ではあるが標高26.1mで、4トレンチの天守曲輪石垣(SL01)下北壁の4層上面が標高32.2m前後であるから、6.1mもの高低差が生じている。これは、5トレンチ上部が激しい削平を受けていたため、東壁面はその状況を良く示す。北壁西側でも既に標高25.0mとなっているが、これは現況の本丸平場の高さと同じである。本来であればこの上に、地山層の削り出しと大きな時期不明の盛土層があったものが、そのままに埋土層(3層)が堆積することから、造成工事の際に大きな削平を受けて削り残された結果であると推測することができる。

SL04の埋土層(3-1～13層)は、12次調査同様に円礫を含むシルト質細砂～粗砂の層で、土壌側の北東側から埋められていた。これらの埋土層は、1～3・5～7トレンチの埋土層と全く同じものであり、同時期に造成工事によって埋められた層である。

**遺物出土状況 (Fig. 27・28)** 出土遺物には、3層から出土した土師器かわらけ(48)、巴紋軒瓦(49～52)、隅瓦(53)、唐草紋軒平瓦(54～57)、埴瓦の可能性のある無段式丸瓦(58)がある。この他、多数の瓦と近現代の陶磁器も出土している。

#### (4) 6トレンチ検出遺構

**調査の概要 (Fig. 22)** 6トレンチは、元城児童公園平場の5トレンチと歩道上の7トレンチの間の斜面において、堀跡(SD03)の南岸や堀底の状況を確認するために設けた、延長約4.6mの南北方向の調査溝である。斜面地であったため、北壁面は約4mの高さとなった。

調査の結果、堀跡(SD03)の南岸や堀底は確認できなかった。

**堀跡(SD03) (Fig. 22)** 12次調査8-2-3トレンチがその規模を明らかに出来なかつたのと同じように、その規模が大きいため堀底や南岸は今回も検出できなかつた。さらに南側に拡大していると

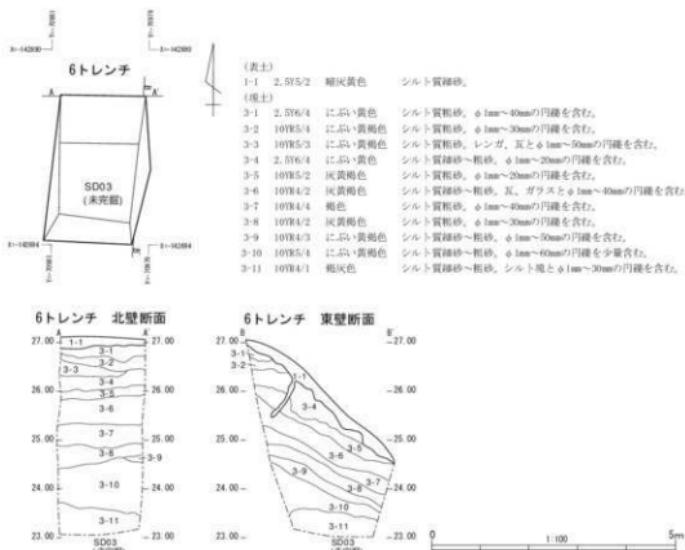


Fig. 22 6トレンチ実測図

みられる。堀底については、12次調査では標高24.8 mまでしか掘削を行えなかった。今回も標高23.0 mまで下げたものの、堀底は確認できなかった。12次調査の成果を踏まえるならば、天守曲輪腰巻土塁の肩部から裾への傾斜が58度余りの急勾配で下がっていたため、これに近い勾配で清水曲輪にまで達し、その裾下に空堀が存在しているものと推測される。

SD03の埋土層(3-1～11層)は、12次調査で確認できたものと同様に、円礫を含むシルト質細砂～粗砂の層で、土塁側の北側から埋められていた。

**遺物出土状況** 出土遺物には3層より多数の瓦と近世～近現代の陶磁器があるが、図示できるものはない。

### (5) 7トレンチ検出遺構

**調査の概要 (Fig. 23・24)** 7トレンチは、1985年の西別館北側コンクリート擁壁補修工事伴う調査 (Fig. 23) で発見された本丸南側石垣 (SL02) 上にあたる。このトレンチの南側は私有地であるため歩道上の斜面において、本丸西側土塁 (SL04) と本丸南側石垣 (SL02) の西端と現存状況を確認するために、8トレンチの約5.5 m西側延長部に設けた、延長約14 mの東西方向の調査溝である。なお、本トレンチは南壁の崩落が心配されたため、南側半分を斜めに残して掘削するに止めた。本丸西側土塁 (SL04) 南西隅の調査も、完掘に到っていない。

調査の結果、本丸西側土塁 (SL04) と本丸南側石垣 (SL02) の西端を確認した。

**本丸南側石垣 (SL02) (Fig. 23・24)** 1985年の調査では布積の9～10段の石垣が確認されていたが、7トレンチでは写真の根石の左から3～5石目の7段目に当たる3石(根石の左から1・2石目は6段目までしか残存していない)を確認すると共に、石垣背後北側の地山切り土までの裏込石、SL02西端の地山切り土面を確認した。上面を検出した3石は、いずれも南側の石面を検出できなかつたが、写真に写る石材の特徴や色調からこの3石と考えられる。上面の最高所の高さは、左より標高21.61 m、標高21.68 m、標高21.672 mである。背面切り土面は確認できなかつたが、石垣背面上には大きなもので長さ0.4 m×幅0.26 m×厚み0.27 mの栗石や、多量の裏込石が埋土(4-1層)と共に用いられていた。この裏込石の上面である標高21.3 mの上には、石材を抜いた後の埋土層(3-1層)が西側寄りに堆積していた。石垣の西端は地山層を切り土したもので標高21.93 mまで残り、その勾配は72度と急勾配であった。

SL02の埋土層は、上部を歩道工事による表土層・盛土層(1・2層)が、その下層には東壁にみるように北側からの埋土層(3層)によって埋められていた。さらに西側の堀跡(SD03)は、3-1～3層により、北東側から埋められていた。

**本丸西側土塁 (SL04) (Fig. 24)** 本丸南側石垣 (SL02) と堀跡 (SD03) の間にある地山層(5-1層)の高まりで、上部を歩道工事や造成工事により、西側を造成工事により壊されている。東端はSL02西端であるが、南西隅では遺構検出で斜め方向に埋土層が入り込んでいる状況を検出しており、工事による削平が大きかったことがうかがえる。このためSL04の残存する上幅は、北壁で8.05 m、南側で7.16 mと差が生じてい



Fig. 23 1985年に確認した本丸南側石垣

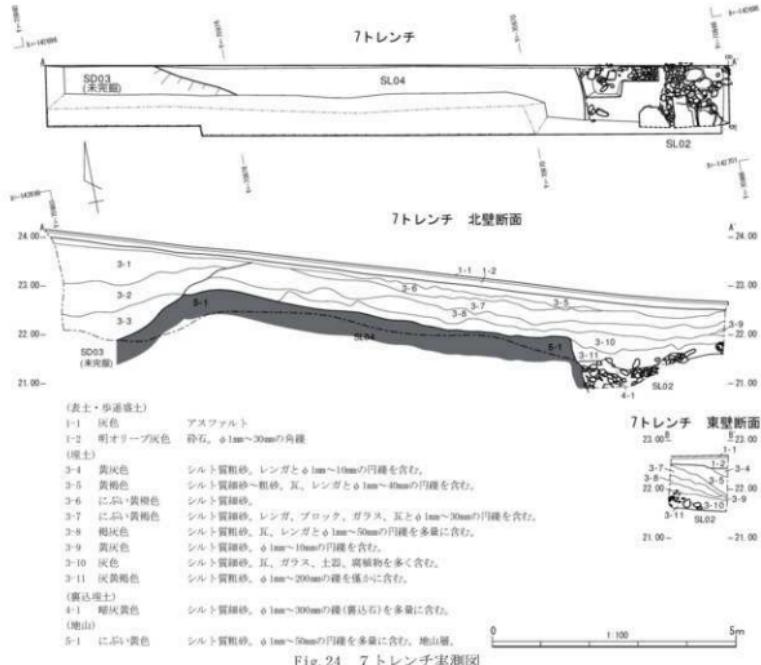


Fig. 24 7 TRENCH 実測図

る。残存するSL04の上面は波打っており、勾配も約8度と歩道の傾斜に近く、歩道工事による影響をみることができる。SL04西側は完掘出来ていないが、その勾配は39度前後で西側に下がっている。調査した最も高い所は標高22.84 m、深い所は標高21.9 mであった。この間に石垣やこれにかかるわる切り土面等は、検出できなかった。西側隣接地の6トレンチでは堀跡(SD03)のみで地山層や石垣は検出してないので、『遠州浜松城絵図』(江戸時代前半)や安政元年(1854)『浜松城絵図』などの城絵図のように石垣があったかどうかは不明である。なお、石垣が確認されるまでは、土塁として扱う。

**遺物出土状況** (Fig. 29) 出土遺物には3層より須恵器の器台(59)、飾り瓦(60)や多数の瓦と近世～近現代の陶磁器・ガラス等がある。

#### (6) 出土遺物

**4トレンチ出土遺物** (Fig. 25・26) 37～39はSL03西側の1・2層から出土した瓦である。37は全長が42.3 cm、幅29.5 cmで釘穴が2穴みられる。38の幅は29.5 cm、39の幅は30.0 cmである。

40～47はSL04の盛土層である4-4・5層から出土した。40は4-4層から出土した、非クロコ成形の橙色の土師器かわらけで、口径は7.6 cm、器高は1.5 cmである。

41～43は軒丸瓦である。41は連珠左巻三巴紋で、巴と連珠の間に圓線がめぐらなもので、復元される瓦当径は15.3 cm、珠紋数は推定で12である。42も41と同じ範の連珠左巻巴紋である。43

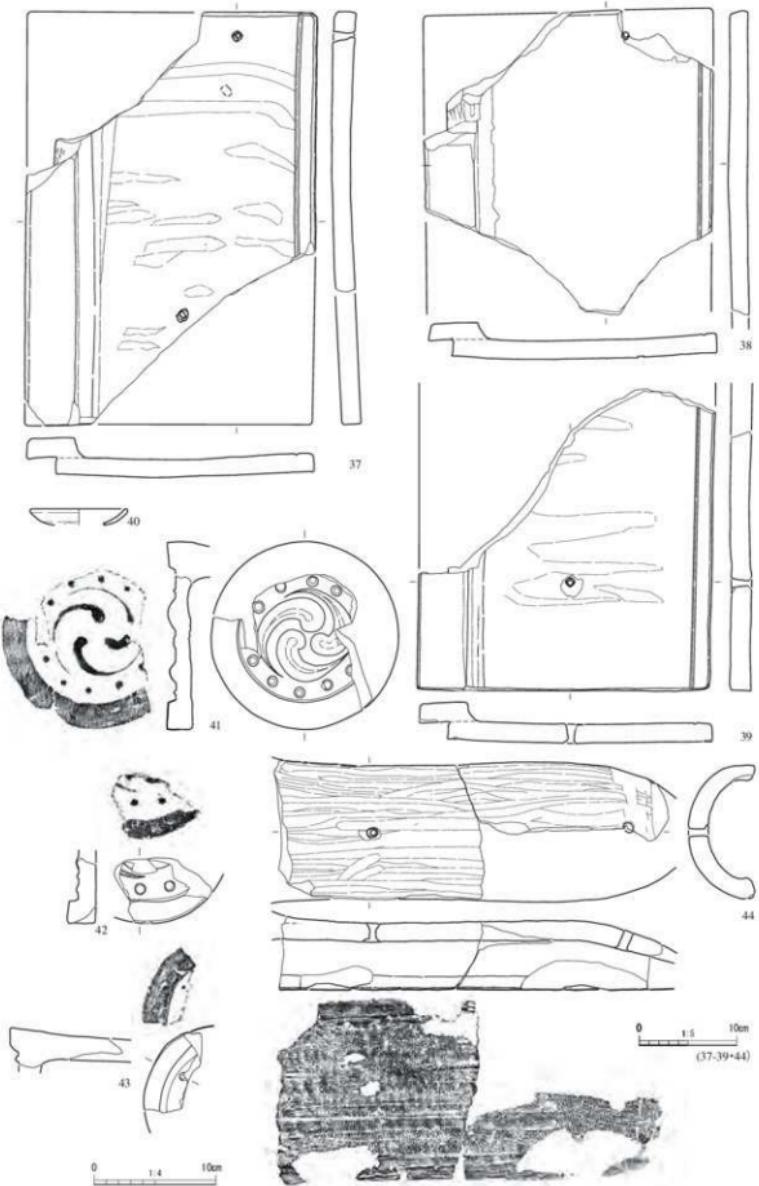


Fig. 25 4 トレンチ出土遺物1

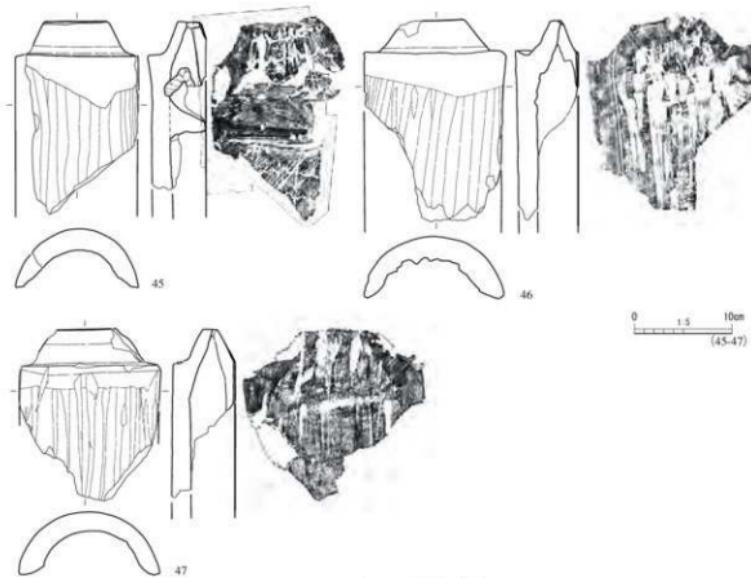


Fig. 26-4 トレンチ出土遺物2

の瓦当紋様は分からぬが、珠紋が残る。

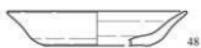
44は瓦当を欠く無段式の丸瓦で、全長は40.5cm以上と長く、幅は14.5cmで、釘穴が2穴みられる。調整は、凸面が丁寧な縦方向の板ナデ（磨き）で、凹面が粗い布目、棒状叩きの痕跡を残す。屏瓦37の全長や釘穴の位置が合うことから、本瓦葺屏瓦の（軒）丸瓦と考えられるが、隅瓦や棟瓦の可能性も残る。

45～47は有段式の丸瓦である。3点とも凸面は全て縦方向の板ナデ（磨き）であるが、凹面には45にはコビキA、細い布目、吊り紐痕、棒状叩きの上に棧が付く、46・47はコビキB、粗い布目、棒状叩きの痕跡が残る。全長のわかるものは無いが、幅は45が12.2cm、46が14.6cm、47が14.5cmである。

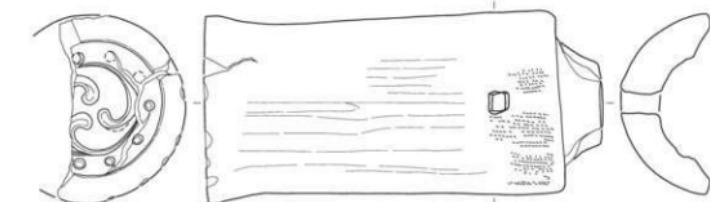
**5 トレンチ出土遺物 (Fig. 27・28)** 48～58は3層から出土した。48はロクロ成形の黄橙色の土師器かわらけで、口径14.6cm、器高2.8cmである。

49～52は軒丸瓦である。49は瓦当の下半を欠くが、簡部は完存する。瓦当は連珠左巻三巴紋で巴の尾が接して圓線となるもので、瓦当径15.4cm、紋様区径11.6cm、珠紋数は推定で10である。簡部の全長は32.7cm、幅14.8cmである。凸面調整は綱目叩きを消して縦方向の板ナデ（磨き）を、凹面調整はコビキA、粗い布目、棒状叩きを残す。釘穴が1穴みられる。50～52は49と同じ範からなる連珠左巻三巴紋である。

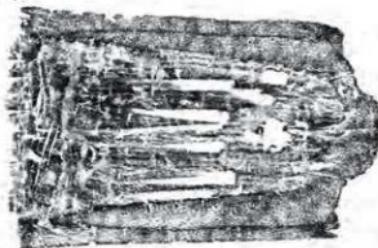
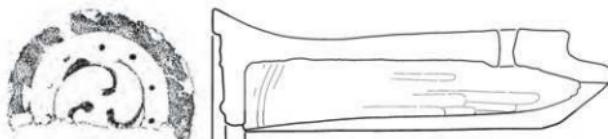
53は瓦当径が縦18.9cm、横20.3cmの横長楕円形のやや下側に、紋様区径11.6cmの49～52と同じ連珠左巻三巴紋がみられる。瓦当裏面に三角形の切隅瓦を納める切り込み部を備えるため、隅瓦



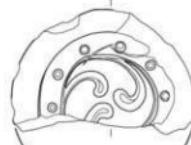
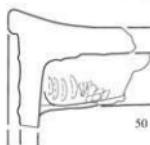
48



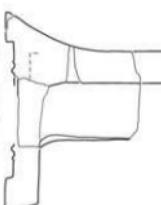
49



50



0 1.4 10cm

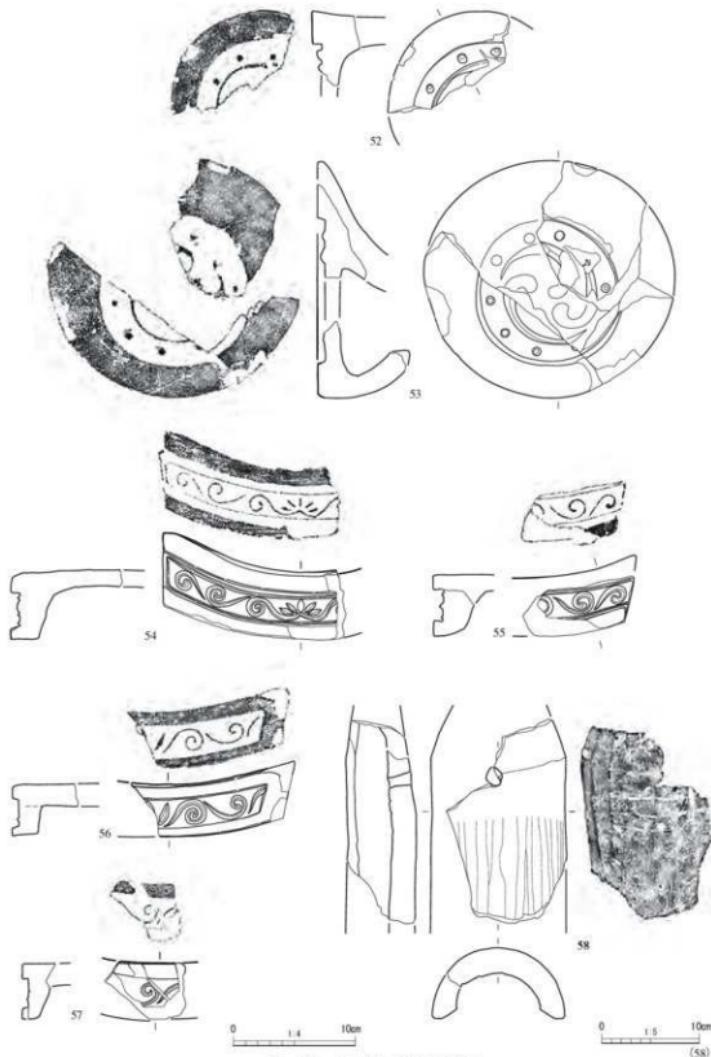


51

Fig. 27 5 トレンチ出土遺物1

と考えられる。

54～57は軒平瓦である。54は五葉紋の下上下3反転均整唐草紋である。区画線の中に中心飾りを種子形の五つの子葉が開く構成とし、第一唐草は中心飾り中央下で接する。唐草は、単線で巻き込みが大きく先端に丸みをおびる。瓦当の左周縁と右周縁は、区画線を残し切り落とされる。55



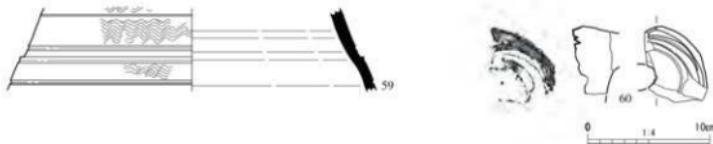


Fig. 29 7 トレンチ出土遺物

も54と同じ範の破片である。56は三葉紋の下上2反転均整唐草紋である。中心飾りを長い種子形の中央と、同様の外反しない脇で構成する。唐草は、単線で巻き込みが大きく、子葉は上端で外反する。57も56と同じ範の破片である。56・57と酷似する紋様は、小田原市・石垣山一夜城、大須賀町・横須賀城でも出土例があり、天正18年(1590)築城の堀尾期使用の軒平瓦と考えられる。

58は44と同じ無段式の丸瓦である。堀瓦の可能性がある。

7 トレンチ出土遺物 (Fig. 29) 59・60は3層から出土した。59は須恵器の器台の台部破片と思われる。6世紀前半頃の古墳等にかかる遺物の可能性がある。

60は飾り瓦の渦巻き部分と考えられる。

#### (7) 小 結

4 トレンチで検出した登り堀跡西側石垣(SL03)は、基礎の盛土に近世の瓦や土器を含むこと、天守曲輪石垣(SL01)南東隅部が本丸西側土塁(SL04)の盛土に埋められていること、石垣上面に近世の瓦が使用されていることなどから、近世の構造物と捉えられる。登り堀跡西側石垣(SL03)の根石下の高さ標高31.3 mから5 トレンチの本丸平場の標高25.0 mまでの比高6.3 mの距離は9 m余りであり、34度余りで急激に高さを減じなければならないため、当初の施設も同様の登り堀であった可能性が高い。登り堀の長さは、安政元年(1854)『浜松城絵図』に14間(約25.45 m)との記載がある。今回の4~7 トレンチ南端までの水平距離が、約23 mであるので、ほぼ真っ直ぐ延びていたと推測することが出来る。ただ、本丸西側土塁(SL04)の西端に設けられていたであろう登り堀と多聞櫓との接続は、安政元年絵図でも不確かで、直接接続してはいなかったようにもみえる。

7 トレンチで検出した本丸西側土塁(SL04)の上面では、本丸南側石垣(SL02)以外の存在を示す遺構を今回の調査では検出できなかった。しかし、本丸南側石垣(SL02)の西端は、Fig. 23の写真のように傾斜をもって綺麗に終わっている。しかし、隅部は算木積ではない。今回検出した地点は入隅の部分で、石垣はさらに南側に折れて出隅を作り、本丸西側土塁(SL04)を囲っていたと考えることも可能である。本丸南側石垣(SL02)の長間に及ぶ石垣の崩壊防止のために出隅が作られたと解釈でき、その規模から考へるとこの上に隅櫓がのっていた可能性が指摘できる。この出隅は、近代に削られてしまったと捉えられるだろう。安政元年(1854)『浜松城絵図』には、既に存在していないが、それらしき石垣の表現がある。その出隅の東西幅は、6 トレンチまでは到達していないことから、現況の地山を削り出した下幅9.3 m以上、12 m以内ではないかと推測される。本丸南側石垣(SL02)上の多聞櫓は、この石垣上にのっていて本丸西側土塁(SL04)の西端までは延びていないと考えられるので、多聞櫓と登り堀の間がどうなっていたのかは城絵図からも判然としない。

### 3 本丸南側石垣及び本丸南側空堀の調査

#### (1) 概要

**位置** 本丸南側では、12次調査5・6トレンチにおいて、歩道の新しい擁壁背後に堀尾吉晴在城期の石垣(SL02)の遺存していることが明らかになった。今回の14次調査においては、歩道上とその斜面に8・9トレンチを設け、市有地内の本丸南側石垣(SL02)を全面検出した。また、本丸南側の市役所西別館跡地において、字「実堀」の空堀跡または鉄門南側延長上の土壠跡と推定される位置に10トレンチを長く設けて、残存状況を確認した。本丸南側では、この3箇所の調査溝を設定して調査を行った。

**層位** 本丸南側で確認できる基本土層は、上層より1層(現代の最上層の堆積層である表土層・アスファルト層・コンクリート層・碎石整地層)、2層(現代の搅乱層・整地層・埋土層)、3層(近世～近現代の堆積層・埋土層)、4層(戦国期の堆積層・裏込石層・埋土層)、5層(新生代第四期更新世の地山層)に大きく区分することができる。本丸南側石垣下の5-2・3層はシルト質細砂から粘土までの堆積層がみられる東鴨江累層に相当し、本丸南側石垣上部の5-1層は多量の円礫を混じえるシルト質細砂で、東鴨江累層上位の三方原礫層と捉えられる。

#### (2) 8トレンチ検出遺構

**調査の概要(Fig. 30～33)** 8トレンチは、延長約19.5mの東西方向の調査溝である。12次調査5・6トレンチにおいて検出した本丸南側石垣(SL02)を、東下がりの傾斜約11度の歩道路面から、間知石積み擁壁背後の斜面までを拡張して検出した。調査区の西端は12次調査5トレンチ西壁面で、東端は9トレンチ境のコンクリート製排水溝までである。

本丸南側石垣(SL02)の斜面上には、石垣の壅みや石垣上に薄く崩落土(2-23層)が被り、さらに裏込石を多量に含む埋土層(2-20～22層)が厚く被い、そして外側にコンクリートで固められた間知石積みの擁壁があった。削平後に残された石垣と裏込め上面にも、歩道の傾斜に合わせて歩道路盤盛土層(2-1～18層)が、その上に碎石整地層とコンクリートやアスファルトの表層舗装(1-1～3層)が重なっていた。

調査の結果、本丸南側石垣(SL02)を延長約10mを検出したが、歩道工事による削平のために、トレンチ中央より東側には歩道の形に削り残された地山が残るのみで石垣は残存していなかった。今回の調査では8トレンチ西側の7トレンチにおいてもSL02の石垣を検出しており、途中検出していない部分もあるが、西端切り土面から総延長18.7m石垣が残存していることを明らかにした。なお、石垣の東端には、石垣に使われていた2石の大型石材が、撤去されずに斜めに取り残されていた。

**本丸南側石垣(SL02)(Fig. 30～32)** SL02の石積みは自然石の小口面か長側面を石面とした、野面積である。その主軸は、根石端に出入りがあり、天端も一様でないので確定的ではないが、N79°W前後とみられる。残存するSL02の石面規模は、延長10.1m、石垣幅が0.5～1.42m、石垣高が0.65～2.52mで、布積の2～8段分を確認した。根石は下面から0.2～0.6mの高さに全て露出している状態で検出した。これはSL02の南側が、工事により本来の遺構面を削り取られていたためで、構築時の根石は地山層(5-2層)に据えられていたと考えられる。残存していた根石は、全て長側面を石面として使っていて、8石が確認できた。根石が据えられた下面の高さは、検出した約10mの間でも異なり、西壁断面(標高18.92m)より左から3石目(標高18.77m)までが

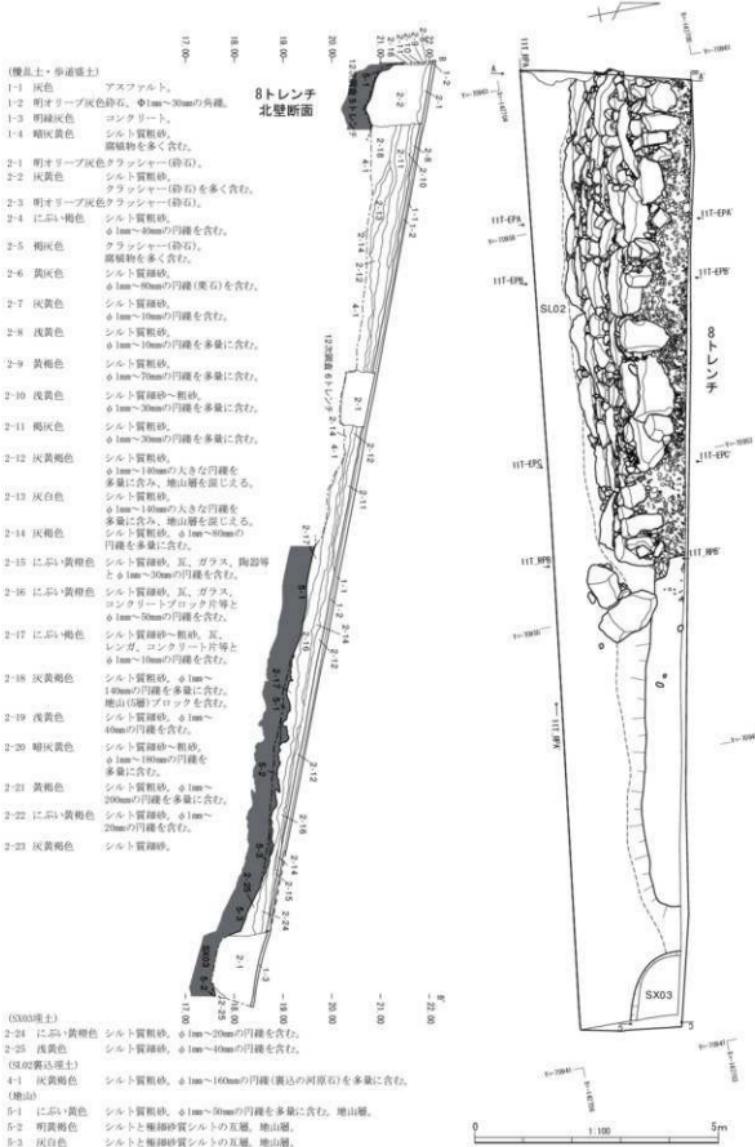


Fig. 30 8トレンチ実測図

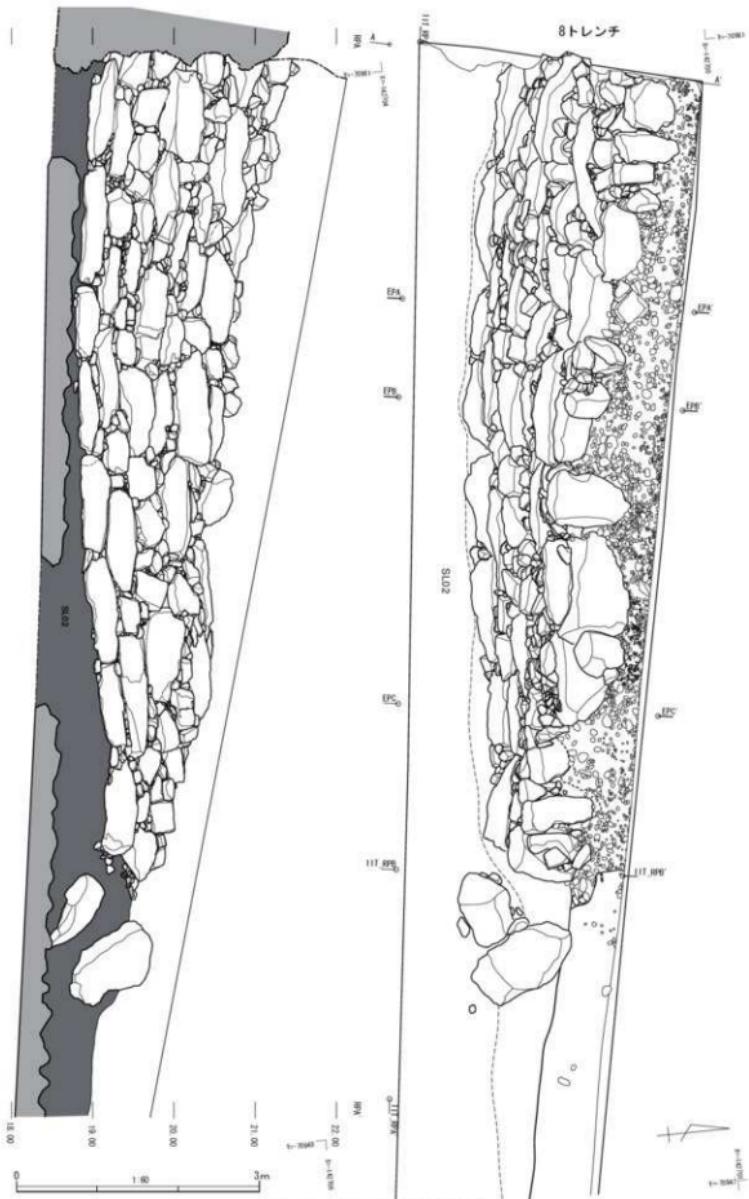


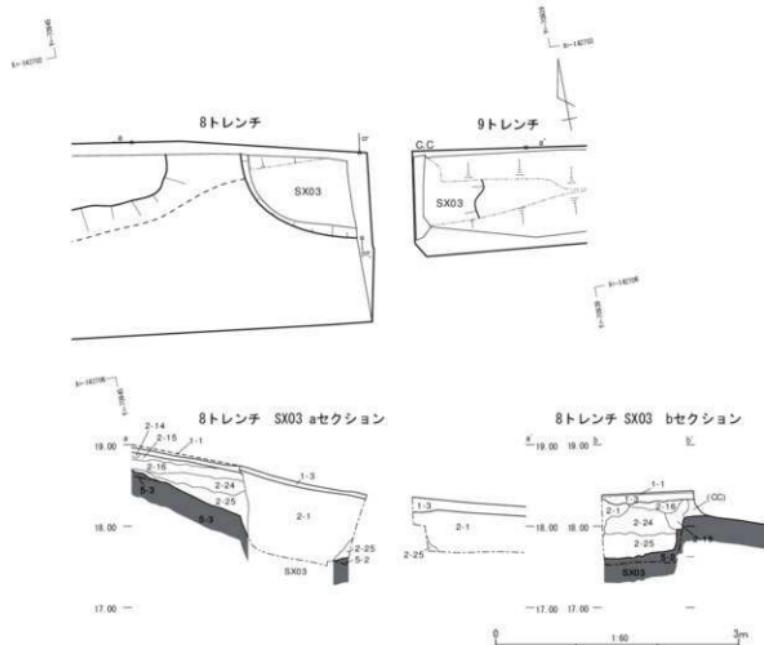
Fig. 31 8 トレンチSL02実測図

東側に下がり、ここから7石目（標高19.15m）まで順次高さを上げ、8石目（標高19.13m）で水平にしているようにみえる。この根石下面の高低差は、二段目以降に石積みの段を増やすか、築石の厚みで次第に解消させている。ここでは、左から4石目より西側に一段増やしているのが、Fig. 31立面図からうかがえる。この曖昧ともみえる根石基礎の構造は、SL02東端の断面Fig. 32RPB - RPB'から判断すると、地山層を掘り込んだ幅0.8m以上（石面より前面は擾乱により不明）、深さ0.3m余りの底の平らな溝（以下、「根石設置溝」という。）に、石材の底である胴に20cm代の大きな栗石を胴飼石として直接敷き、側面長0.9～1.5m×厚さ0.25～0.4mの石材を、飼石（胴飼石・舗介石・迫飼石等）で石面の勾配を調整しながら小口繋ぎに横に置き並べるものであった。これには、胴木等の基礎構造材は使用していない。次に二段目（一番）からは、小口面か長侧面を石面とする奥行き（控）の長い石材が使われている。根石設置溝に裏込石を敷いて埋め、石面を合わせ上下の石材の設置端である合端合せを行いながら、石尻（櫓）は切り土底の22度前後の前傾斜の斜面に置き、飼石で調整し安定させて横に置き並べている。この二段目から上段の石垣背後の地山切り土の状況は、今回の調査では確認できていない。しかし、Fig. 32西壁断面から推測すると、高さ2.5mで石面より約1m奥にはほぼ同じ角度の切り土面があることから、これが階段状でないとした場合、石面と同じ62度前後の勾配とみられることから、石垣背後底面に奥行きが1.3～1.4m



Fig. 32 8 トレンチ西壁断面・見通し図

程度の狭い空間が生まれるものと思われる。さらに、この切り土底面は水平ではなく、緩やかな前傾斜であることから、控えの長い石材が用いられた場合は、三段目(二番)の石尻(軸)はこの斜面に置かれた可能性がある。これに裏込石が入れられ、四段目(三番)以降の石垣構築と背面排水が設けられたと考えられる。石面の勾配(矩)は、現状では一様ではない。Fig. 32の5箇所の凡そ勾配は、西壁RPA-A'が62度、EPA-A'では根石から4段目までが約67度、これより上が約45度、RPB-B'が57度、RPC-C'が58度、東端断面RPB-RPB'が2石ではあるが55度であった。天守曲輪石垣SL01では、12次調査の石垣高5.24mの8-1トレーナーで、根石から天端石までに雨落しもない反りの無い直線的な62度の勾配であった。このことを考えると、EPA-A'周辺の幅3m余りで上段の勾配が変わるのは、下段の牟みで上段が後ろに倒れこんでいるためではないかと思われる。このことから、SL02の平均的な勾配は、直線的な57~62度前後の勾配で、天守曲輪石垣SL01とほぼ同じかこれに近い勾配であったと考えられる。築石の最大のものは、根石左から2石目と3石目の間6段目の幅11.65m×高さ0.56m、根石左から4石目5段目の幅1.55m×高さ0.58m等がある。奥行き(控え)の長さが分かる最大のものは、根石左から6石目と7石目の最上段の2石で、幅1.32m×高さ0.18m×奥行き(控え)1.05m、幅1.2m×高さ0.28m×奥行き(控え)0.86mである。使用石材は、珪岩を主体に緑色岩を含む。また、築石の間には、河原石や割り石を用いた間詰石が多数残存していた。石尻(軸)には、裏込4-1層内に栗石として直径3~16cm余りの円錐多数と川砂利が使われ、硬く叩き閉められていた。



**SL02遺物出土状況** (Fig. 35) 出土遺物には、搅乱層(2層)から出土した近世～近現代の陶磁器、無字錢紋軒丸瓦(61)と多数の瓦がある。

**土坑(SX03)** (Fig. 33) SX03は、8トレンチ西端と9トレンチ東端に跨った状態で検出した土坑状の遺構である。

SX03の規模は、大部分が北壁内に入るが、東西が4.3m以上、南北が1.1m以上、深さ1.14m余りで、二段に下がる。遺構の時期は、歩道の路盤盛土層(2-1～18層)である2-16層が上にのっていること、地山層(5-3層)を掘り込んでいること、遺構の位置が石垣(SL02)の真上であること等から、歩道工事と同時期の遺構と考えられる。

SX03の埋土層は、2-24・25層で、土坑底に多量の円窓を入れていた。

**SX03遺物出土状況** 出土遺物には近現代の陶磁器と瓦等があるが、図示できるものはない。

### (3) 9トレンチ検出遺構

**調査の概要** (Fig. 34) 9トレンチは、8トレンチの歩道東側延長部で、歩道を横断する2箇所のコンクリート製排水溝間の延長約6mに設けた東西方向の調査溝である。当初はさらに北側にも延長して調査溝を設定する計画であったが、北側に山側斜面の雨水を集めることで大きな集水枡が埋設されていたため、これ以上の拡張を取り止めた。

調査の結果、2-1層の集水枡掘り方が北壁面にまでおよび、上部は全て歩道の掘削で標高17.65～17.46mまで5層が削平を受け、その上に2-2～5層の歩道路盤盛土が行われていた。遺構は9トレンチ東側のSX03底部の東端が辛うじて確認できた以外、遺構は検出できなかった。

**遺物出土状況** 出土遺物には、搅乱層(2層)から出土した近世～近現代の陶磁器や瓦があるが、図示できるものは無い。

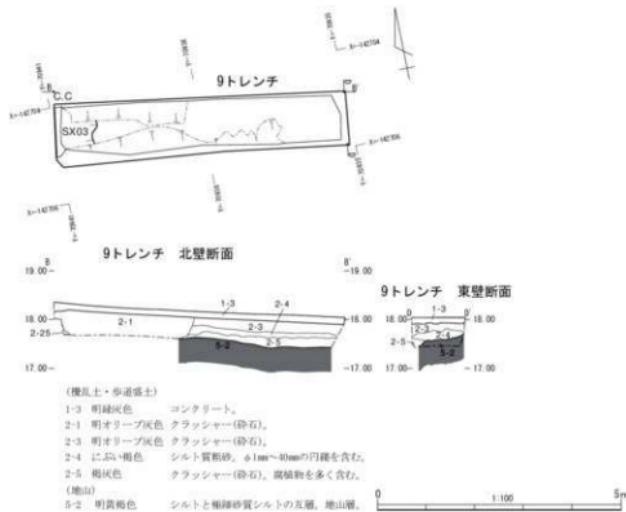


Fig. 34 9トレンチ実測図

#### (4) 10トレンチ検出遺構

遺構の概要 (Fig. 36) 10トレンチは、旧市役所西別館建物基礎を避けるため敷地の最も東辺に、市道中央住吉線側から北側にむかって設けた延長約37mの南北方向の調査溝である。このトレンチは、4分割 (10-1~4) して調査を行った。

調査の結果、トレンチ内の全ての箇所において、建物基礎の抜き取り等により大きく攪乱され、何らの遺構も残されていないことが判明した。トレンチの各所で深堀を試み、トレンチの北端では標高16.0mまで下げた所もあるが、いずれもコンクリートガラが多く、これを抜き取ることによって壁面が崩落したため、地山層までの確認を実施することができなかつた。

10トレンチの堆積層は、1-1・2層が旧市役所西別館解体後の公用車駐車場整地層で、2-1~10層が西別館の解体・撤去時の埋土層である。

遺物出土状況 (Fig. 37) 出土遺物には、埋土層(2層)から出土した近世～近現代の陶磁器と、巴紋軒丸瓦(62)、巴紋軒棟瓦(63・64)、唐草紋軒平瓦(65)、紋様不明の軒平瓦(66)、ヘラ描き「○」のある平瓦(67)等の多量の瓦がある。

#### (5) 出土遺物

8トレンチ出土遺物 (Fig. 35) 61は2層から出土したもので、無字錢紋軒丸瓦である。青山氏在城期(1678~1702年)の軒丸瓦と考えられる。

10トレンチ出土遺物 (Fig. 37) 62~66は2層から出土した。62は軒丸瓦で、連珠左巻三巴紋の中央部の破片である。63・64は軒棟瓦の丸瓦部で、63は左巻三巴紋で瓦当径8.3cm、64は連珠巴紋である。

65・66は軒平瓦である。65は菊紋の唐草紋で、棟瓦平瓦部の可能性がある。中心飾りは点珠に16弁を配す菊紋とする。唐草は単線で巻き込み先端を肥大化し雲状にしたもので、中心飾りから右は下上に左は上下に唐草を配す。66は軒平瓦の破片で、紋様は不明である。

67は平瓦で、狭端面にヘラで「○」を描く。

#### (6) 小結

8・9トレンチでは、堀尾期の本丸南側石垣SL02を延長約10m分を検出した。7トレンチの西端からは、延長約18.7mが残存していたことになる。歩道とSL02の主軸が異なっていたために東側半分は残っていないが、西側では激しい削平ではあったが残されていた。ここで明らかとなつた根石の設置手法は、地山の高低差を全て無くして均一にして高石垣を積むのではなく、かなり柔軟な方法が用いられていた。根石の設置方法は、想定される石面の勾配に合わせ背後の山を切り土し、その底面の奥から1.3~1.4m前面に、幅0.8m以上×深さ0.3m余りの底の平らな根石

設置溝を穿ちここに根石を設置していた。この根石設置溝は、日本の伝統的建築や石垣の技術書(明治37年(1904)『日本家屋構造』、享和・文化年間『加賀藩穴生方後藤家文書』等)において、地上からくる荷重を地面に広く平均に分散させるために行う「地形」と呼ばれる作業で、そのために行われる掘削を「根切」(=根伐)と呼び、細長く掘ることを「布掘」と記している

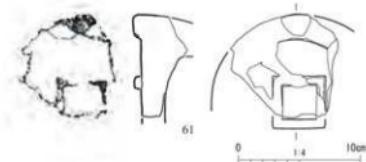


Fig. 35 8トレンチ出土遺物

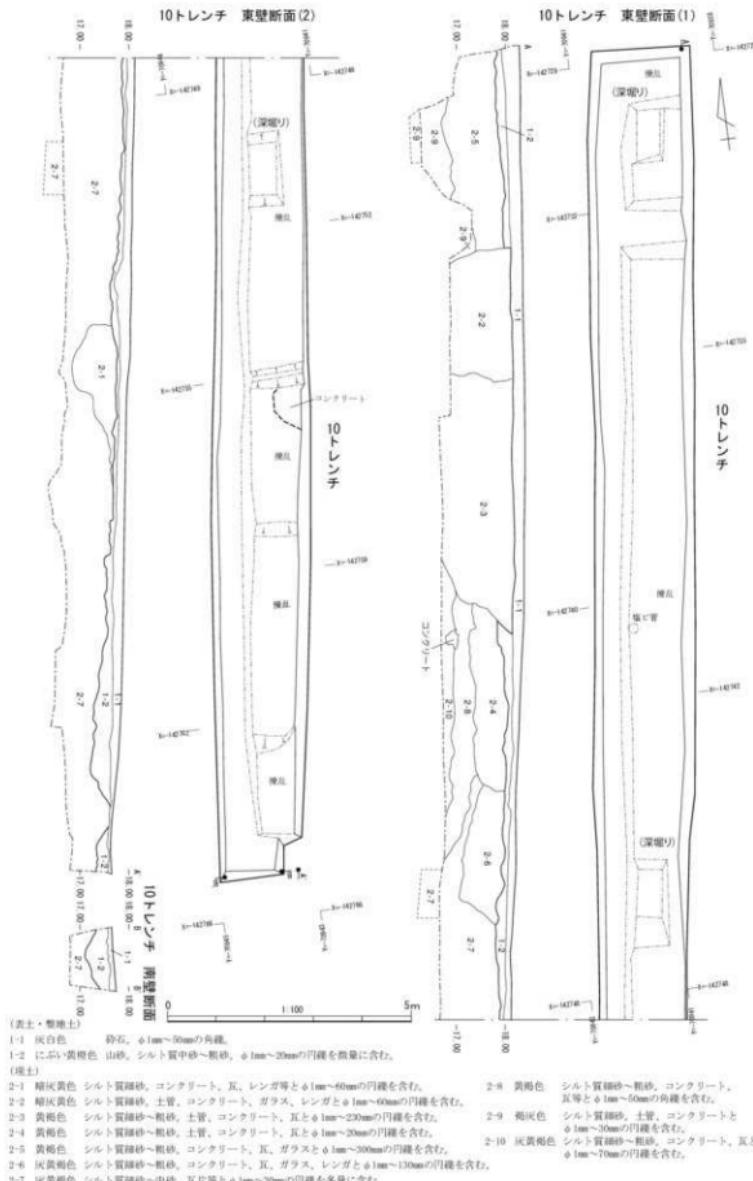


Fig. 36 10トレンチ実測図

ものに相当する。今回検出した石垣の位置は、本丸南側の主要な門である鉄門の西側であり、この上には多聞櫓（桁行22間×梁行3間）が設けられるなど、視覚的にも重要視された石垣と考えられる。にもかかわらず、根石設置溝の溝底の高低差を全て解消するような地山掘削を行っていない。むしろ、地山の大規模な掘削が行えなかつたため、地山の高低差を残しつつ地形に合わせた「根切」を行っていたとみられる。この石垣下段の高低差は、段数や石面の高さや前面の整地により調整され、石垣中段以上ではその様子をうかがい知る事は出来ない。

こうした地形に合わせた基礎構造は、石垣の孕みを生じさせた原因と考えられる。左から3石目の根石の上部が孕んでいるのは、この根石設置高が最も低い場所にあたり、孕みの原因がこの「根切」の不均衡にあった可能性が高い。

この根石設置溝による石垣の構築方法が明らかとなつたことは、極めて重要な成果であったといえる。

10トレンチでは、字「実堀」の空堀跡または鉄門南側延長上の堀跡の検出を目指したが、擾乱の範囲が広く深いため、当初の目的を果たせなかつた。

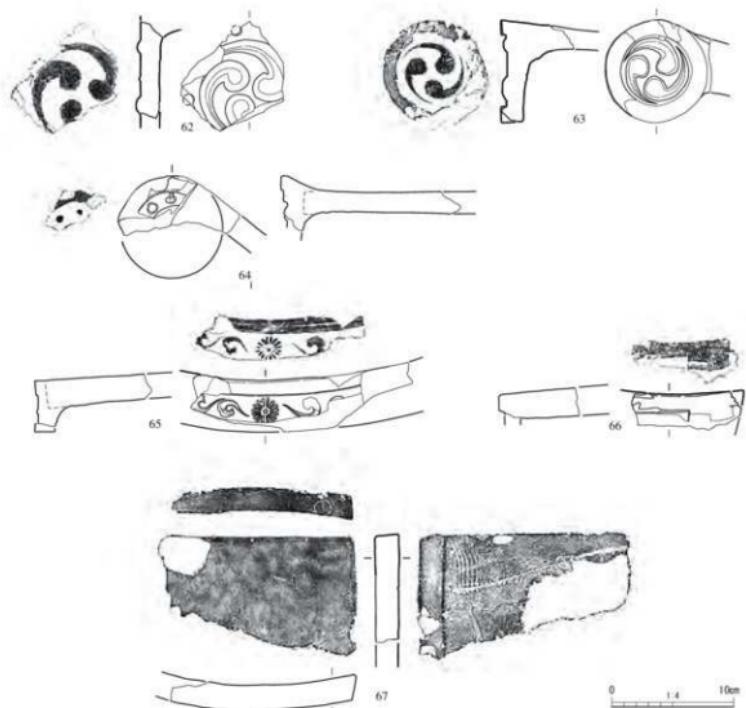


Fig. 37 10トレンチ出土遺物

## 第3章 総括

今回の14次調査により新たに明らかとなった成果について評価を行い、本書の総括としたい。

### 1 天守曲輪南西部の成果

**堀跡 (SD01) の状況** 埋門下の1トレーナーでは、天守曲輪南西部を巡る二重堀跡 (SD01・02) のうち、トレーナー北側に曲輪内側のSD01北岸斜面を検出した。今回の調査においては、堀跡 (SD01) の天守曲輪側斜面を確認したのみで、規模は明確に出来なかつた。

**堀跡 (SD01) の評価** 1トレーナーでの曲輪北岸斜面の検出状況により、二重堀跡 (SD01・02) は曲輪南西側尾根を断ち切って連続した堀跡を巡らすものではなく、埋門下に現況と同じ土橋を設けていた可能性が高まつた。また、SD01北側の傾斜角度は、堀の上部が43度余りの傾斜であったものが、堀の下部では78度もの急傾斜で堀底に至つてゐた。中土手の存在も含め、さらなる調査が必要であらう。

**堀跡 (SD02) の状況** 天守曲輪南西部を二重に巡る堀跡 (SD01・02) の外側の堀跡 (SD02) の南西岸を、2トレーナーと3トレーナーで検出した。

2トレーナーで検出したSD02は、南西岸肩部の凡その角度がN9° Wで、上幅は3.2 m以上、12次調査で確認した傾斜(約55度)と同様な約56度の急激な傾斜となって堀底にいたつてゐた。その深さは1層及び2層下の堀上端(標高28.03 m)から、深堀調査で確認した最深部堀底(標高25.38 m)までの2.65 mであるが、さらに深くなるものと予想された。

3トレーナーで検出したSD02は、トレーナー南西壁面斜面に南西岸を検出した。このトレーナー南西壁の位置は、現況では南東にも南西にも3 m余りで急な崖面となつてゐる所である。12次調査で確認した中土手を検出することはできなかつたが、西端城曲輪の東端が明らかとなつた。今回の調査における堀跡 (SD01・02) の上幅は8 m以上、深さは2.2 m(標高25.32 m)以上である。南西岸肩部から斜面への勾配は、岸側に内灣するため、70度もの急勾配となつてゐた。

**堀跡 (SD02) の評価** 天守曲輪を巡る堀跡 (SD01・02) は、今回の調査で上幅が8 m以上、深さは2.2 m(標高25.32 m)以上であることが判明した。12次調査では、堀跡全体 (SD01・02) の上幅は13.42 m、SD02の上幅が6.42 m、深さはSD02下の最深部で約2.2 m(標高25.80 m)であった。溝底は12次調査よりも0.5 m以上下がつており、西側に深い規模の大きい空堀であることがあらためて確認できた。ただし、SD02から東側のより規模の大きい堀跡 (SD03) への繋がり方は、今回の調査でも明らかに出来なかつた。

### 2 西端城曲輪の成果

**溝状遺構 (SX01)・井戸状遺構 (SX02) の状況** 2トレーナーにおいて、西北西方向の溝または堀と判断される遺構 (SX01) と、その隣接する南側に井戸状の遺構 (SX02) を検出した。

SX01の断面形状は、逆台形を二段に重ねた形状で、上幅3.27～3.53 m、底幅1.9～2.1 m、深さ1.25 mであった。この溝は使用中に拡張された可能性が考えられる。この拡張は、溝の下層部分が堆積した後に、上部を大きく掘削してゐた。土層の堆積状況から、上中下層の3層に大別することができた。遺物が出土したのは、下層上部の4～8層と中層の4～5～7層からで、上層からの遺物の出土は無かつた。中層は拡張直後の最初の堆積層で、炭化物(炭・灰・焼けた木片等)や遺物

を多量に含み、古瀬戸の擂鉢（20）、土師器の内彌形内耳鍋（27）・内彌形羽釜（25・26）・くの字形内耳鍋（28～30）・かわらけ（21・22）等が、北東岸の斜面にまとまって捨てられたような状態で出土した。下層上部の出土遺物は2群に分かれる。7世紀末～8世紀初頃の須恵器の坏蓋（14）・壺（15・16）、土師器の把手付鉢（17）といった遺物群は、これまでも散発的に城内から出土する、古墳や横穴の遺物が築城に伴う掘削や造成工事で破壊され紛れ込んだものと考えられる。他の15世紀後葉の土師器のかわらけ（23）・羽付鍋（24）、古瀬戸の灰釉腰折皿（18）・擂鉢（19）、銅鏡「政和通宝」（31）等の遺物群は、その器種に煮沸などの調理にかかるわるものが多くを占める。また、巻貝のアカニシ2個（32・33）は食物残滓の一つとみられるものである。下層上部と中層の遺物群の時期差は、大きなものとは考えられず、またその機構構成も似たものが多くを占める。

SX02はSX01の南西約0.9 mにあって、2トレンチ南端にあり半分以上がトレンチ外に存在する半円形の井戸状の遺構であるが完掘していない。堆積層の上層は、SX01を埋める同一の埋土層で埋められていた。

**溝状遺構（SX01）の評価** 今回検出したSX01は、その出土遺物の年代から、これまで知られるこの無かった浜松城築城以前の15世紀後葉の遺構である。溝状遺構SX01がどの様に広がるのかは今後の調査によらねばならないが、SX01が小さな溝ではなく堀状の遺構である点は、中世の城館を想起させる。検出面が浅いことから、現況の西端城曲輪の原形が、この時期まで遡る可能性が高いだろう。さらに、西端城曲輪のみで隣接する山頂部一帯を含め城郭化しなかったとは考えにくいので、周辺を含めた一帯に徳川期浜松城以前の前身遺構（山城）が存在していた可能性が高くなつた。これまで浜松城の前身は、『遠州浜松城絵図』（17世紀）などの近世絵図と文献から、浜松城跡北東の「引馬宿」（引間宿）に近い、現在の東照宮一帯の「古城」（引馬城）と考えられ、山頂一帯への城域拡張は元亀元年（1570）に徳川家康が引馬城に入城した後のものと考えられてきた。しかし、今回のSX01の発見により、延徳3年（1491）に始まる今川氏親の遠江侵攻による守護斯波義達との第一次対戦や、永正元年（1504）に始まり永正8～13年（1511～1516）の今川氏親の遠江制圧・東三河侵攻と斯波・大河内氏との引間城をめぐる攻防などの第二次対戦でその名が見える引間城は、徳川期浜松城以前の前身遺構（山城）であった可能性がてきた。

また、出土遺物にはSX01の近隣に調理場（厨房）的なものがあった可能性を示すものが多いが、遺構周辺施設の性格を考える上で参考となる。さらにその廃棄状況は、一過性の高いものであることを示唆していた。そしてSX01・SX02の廃絶は、同一の埋土（整地）層で埋められていたことが推測され、再整備が図られたことを示すものと考えられる。

### 3 本丸西側の成果

**本丸西側土塁（SL04）・登り堀跡西側石垣（SL03）の状況** 4トレンチの天守曲輪石垣（SL01）の南東隅において、本丸西側土塁（SL04）の上に登り堀跡西側石垣（SL03）を確認した。なお、登り堀跡東側石垣は確認できなかった。検出したSL03の規模は、トレンチ幅の1.66 mで、高さは4-7層に埋まっている状態で石垣残存高が約0.7 m、根石底からの石垣残存高は0.84 m余りである。石垣は自然石を野面積したもので、平積みの7段余りが残っていた。基礎の盛土に近世の瓦や土器を含むこと、天守曲輪石垣（SL01）南東隅が本丸西側土塁（SL04）の盛土に埋めていること、石垣にも近世の瓦が使用されていることなどから、SL03は近世のものと捉えられた。

**本丸西側土塁（SL04）・登り堀跡西側石垣（SL03）の評価** 登り堀跡西側石垣（SL03）の根石下の高さ標高31.3 mから5トレンチの本丸平場の標高25.0 mまでの比高6.3 mの距離は9 m余りであ

り、34度余りで急激に高さを減じなければならないため、当初の施設も同様の登り堀であった可能性が高い。登り堀の長さは、Fig. 39 安政元年（1854）『浜松城絵図』から14間（約25.45 m）との記載がある。今回の4～7トレンチ南端までの水平距離が、約23 mであるので、ほぼ真っ直ぐ延びていたと推測することが出来る。ただ、本丸西側土塁（SL04）の西端に設けられていたであろう登り堀と多聞櫓との接続は、安政元年絵図でも不正確である。絵図では、直接接続してはいなかつたように描かれている。

#### 4 本丸南側石垣及び本丸南側空堀の成果

**本丸南側石垣（SL02）・本丸南側空堀の状況** 8・9トレンチでは、堀尾期の本丸南側石垣SL02を延長約10 m分検出した。7トレンチの西端からは、延長約18.6 mが残存していたことになる。歩道とSL02の主軸が異なっていたために東側半分は残っていなかったが、西側では基底部を中心にして石垣が良好に残存していた。

10トレンチでは、字「実堀」の空堀跡または鉄門南側延長上の跡跡の検出を目指したが、市役所別館の搅乱の範囲が広く、かつ深いため、当初の目的を果たせなかつた。

**本丸南側石垣（SL02）の評価** ここで明らかとなった根石の設置手法は、地山の高低差を全て無くして均一にして高石垣を積むのではなく、想定される石面の勾配に合わせ背後の地山を切り土し、その底面の奥から1.3～1.4 m前面に、幅0.8 m以上×深さ0.3 m余りの底の平らな根石設置溝を穿ちここに根石を設置するものであった。この根石設置溝は、日本の伝統的建築や石垣の技術書（明治37年（1904）『日本家屋構造』、享和・文化年間『加賀藩穴生方後藤家文書』等）において、地上からくる荷重を地面に広く平均に分散させるために行う「地形（ちぎょう）」と呼ばれる作業で、そのために行われる掘削を「根切（ねぎり）」（=根伐）と呼び、細長く掘ることを「布掘（ぬのほり）」と記しているものに相当する。今回検出した石垣の位置は、本丸南側の主要な門である鉄門の西側であり、この上には多聞櫓が設けられるなど、東海道筋からもよく見える位置にあって視覚的にも重要視された石垣と考えられる。このような根石設置溝の類例は、天正7年（1579）に丹波を平定した明智光秀が築城した福知山城本丸石垣（天守丸）の補強工事においても確認されている（福知山市教育委員会2003）。この根石設置溝による石垣の構築方法が明らかとなつたことは、水堀における胴木上に組まれた石垣のみがこれまで顕著であったことから、極めて重要な成果であつたといえる。

また、7トレンチで検出した本丸西側土塁（SL04）の上面では、本丸南側石垣（SL02）以外の存在を示す遺構を今回の調査では検出できなかつた。しかし、本丸南側石垣（SL02）の西端は、Fig. 23の写真のように傾斜をもって綺麗に終わっているが、算木積ではないため出隅ではなく入隅の部分と考えられた。これらの成果から写真の石垣は、さらに南側に折れて出隅を作り本丸西側土塁（SL04）を囲って櫓台となっていたと考える方が自然なようと思われる。本丸南側石垣（SL02）の長間に及ぶ石垣の崩壊防止と、本丸南西隅を防備するために隅櫓が設けられていたと推測することができるのではないだろうか。この櫓台は、安政地震の被害報告であるFig. 39 安政元年（1854）『浜松城絵図』には石垣の表現が残るが、近代には削られてしまったようである。この櫓台の東西下端幅は、6トレンチまでは到達していないことから、現況の地山を削り出した下幅9.3 m以上、12 m以内と推測された。

以上の成果から、Fig. 39 安政元年（1854）『浜松城絵図』に記載された建物や堀の規模（多聞櫓（桁行22間×梁行3間）、鉄門（桁行9間×梁行4間半）、菱櫓（桁行5間×梁行4間））と、本丸南側

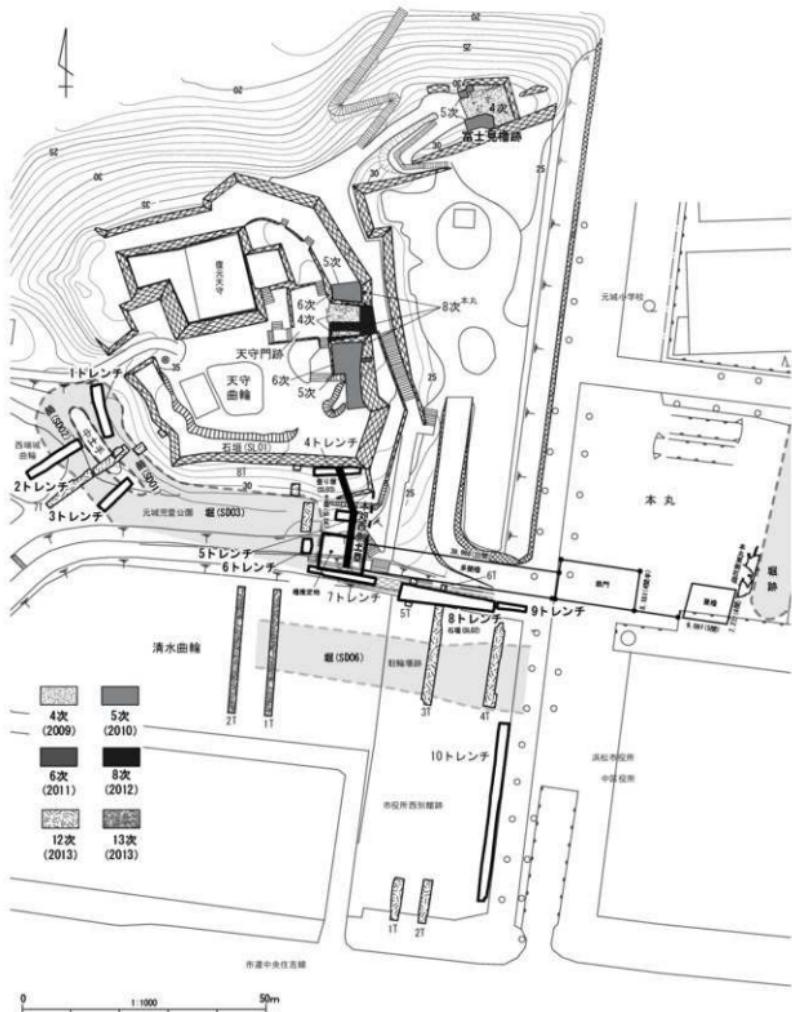


Fig. 38 浜松城跡推定遺構配置図

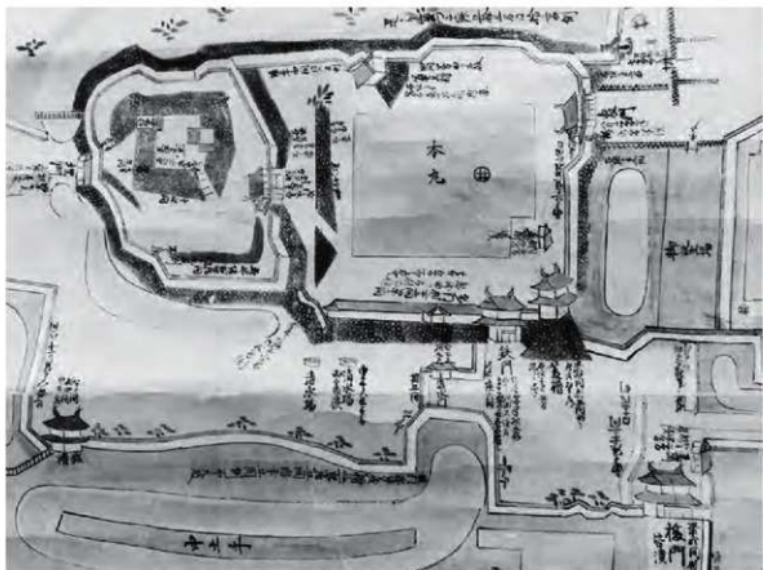


Fig. 39 安政元年（1854）『浜松城絵図』（静岡県立浜松北高等学校所蔵）

石垣の成果、1979年市役所西館北地下駐車場建設工事で検出された本丸東側石垣の位置、本丸の現況の高さを基準に石垣高を想定してFig.38推定遺構配置図を作成した。なお、石垣の範囲は、旧地盤高が不明なため記入していない。

これにより本丸南側の鉄門前の景観は、鉄門に向かって右側に土塀を挟んで菱檜が、鉄門に向かって左側に22間もの長大な多開檜と、左端に想定される隅檜が存在したと推測できるのではないか。また、鉄門の位置は、現在の市役所西側の歩道の中央部分を横切る形で存在していたことが、ほぼ推測できるようになった。

#### [参考文献]

- 蘿澤良祐 2007 「第1章総論」『愛知県史』別編 廉業2 中世・近世 濱戸系 愛知県  
鈴木一有 2002 「戦国時代にかかる諸問題」『桓武西宮遺跡』(財)浜松市文化協会  
鈴木正貴 1996 「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕—そのデザイン—』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会  
浜松市教育委員会 1996 『浜松城跡－考古学的調査の記録－』  
浜松市教育委員会 2003 『松下屋敷跡の調査』『浜松市遺跡調査集報』  
浜松市教育委員会 2015 『浜松城跡10』  
福知山市教育委員会 2003 『福知山城石垣発掘調査 現地説明会資料』

Tab. 2 出土遺物観察表

Na	遺物	層位	種別	細別	反転	口径 (cm)	開高 (cm)	底径 (cm)	厚さ (cm)	色調	備考
1	1	3層	須恵器	壺	反		(7.8)			灰	貼り付け高台
2	1	3層	瓦	軒丸瓦						灰黄	彌ぎ九つ目結紋
3	1	3層	瓦	軒丸瓦						灰白	左巻巴紋+珠紋
4	1	5層	瓦	軒丸瓦						灰白	左巻巴紋+珠紋
5	1	3層	瓦	軒丸瓦						灰白	左巻三巴紋+珠紋
6	1	3層	瓦	軒丸瓦						灰白	左巻巴紋
7	1	3層	瓦	軒丸瓦(丸瓦部)						灰白	左巻三巴紋
8	1	3~15層	瓦	軒平瓦			1.8			灰白	五葉紋2反転均整唐草紋
9	1	3層	瓦	軒平瓦		21.0			2.0	淡黄	三葉紋2反転均整唐草紋
10	1	3層	瓦	軒平瓦					1.9	灰白	三葉紋2反転均整唐草紋
11	1	3層	瓦	軒平瓦					2.0	灰白	唐草紋
12	1	3層	瓦	平瓦					2.1	灰黄	
13	1	3層	瓦	腹斗瓦		13.6			2.0	灰白	
14	2	SX01	4~8層	須恵器	环盖	反	(8.0)			灰	
15	2	SX01	4~8層	須恵器	長頸壺	反	(11.2)			灰白	
16	2	SX01	4~8層	須恵器	長頸壺	反				淡黄	
17	2	SX01	4~8層	土師器	把手付鉢	反	(17.2)	(16.9)		にぶい橙	
18	2	SX01	4~8層	陶器	灰釉腰折皿		10.9	3.0	4.6	灰白	輪:灰オリーブ色、古瀬戸後期IV新
19	2	SX01	4~8層	陶器	抹棒	反		(11.0)		灰	外外面泥塑掛け、古瀬戸後期IV新
20	2	SX01	4~7層	陶器	抹棒			7.6		暗赤褐	外外面泥塑掛け、古瀬戸後期IV新
21	2	SX01	4~7層	土師器	かわらけ	反	(10.4)	2.9	5.0	にぶい黄緑	ロクロ成形
22	2	SX01	4~7層	土師器	かわらけ	反	(11.0)	2.9	5.6	浅黄緑	ロクロ成形
23	2	SX01	4~8層	土師器	かわらけ	反	(12.4)	3.4	6.0	浅黄緑	ロクロ成形
24	2	SX01	4~8層	土師器	羽付罐	反	(19.6)			浅黄緑	煤付着
25	2	SX01	4~7層	土師器	内彫形羽釜	反	(20.4)			浅黄緑	煤付着、穿孔2
26	2	SX01	4~7層	土師器	内彫形羽釜	反	(20.6)			浅黄緑	煤付着
27	2	SX01	4~7層	土師器	内彫形内丘罐	反	(21.2)			一桟	煤付着
28	2	SX01	4~7層	土師器	くの字形内耳罐		17.8	(12.3)		淡黄	煤付着、内耳2(欠損)
29	2	SX01	4~7層	土師器	くの字形内耳罐		20.3	(12.0)		にぶい黄	煤付着、内耳2
30	2	SX01	4~7層	土師器	くの字形内耳罐	反	22.0	(14.7)		淡黄緑	煤付着、内耳2
31	2	SX01	4~8層	銅製品	錢貨「政和通宝」	反	(2.5)			灰黒	北宋錢、政和元年(1111)初鋤
32	2	SX01	4~8層	參貝	アカニシ					白	
33	2	SX01	4~8層	參貝	アカニシ					白	
34	3	3層	瓦	平瓦			2.0			灰	
35	3	3層	瓦	平瓦			2.0			灰オリーブ	
36	3	3層	瓦	飼り瓦						灰	
37	4	SL03	1~2層	瓦	陶瓦		29.5	42.3	2.0	黒褐	釘穴2
38	4	SL03	1~2層	瓦	陶瓦		29.5		1.9	灰	
39	4	SL03	1~2層	瓦	陶瓦		30.0		1.9	灰	
40	4	SL04	4~4.5層	土師器	かわらけ	反	(7.6)	(1.5)		穢	非ロクロ成形
41	4	SL04	4~4.5層	瓦	軒丸瓦					灰	左巻三巴紋+珠紋(12)
42	4	SL04	4~4.5層	瓦	軒丸瓦					灰	左巻巴紋+珠紋
43	4	SL04	4~4.5層	瓦	軒丸瓦				2.0	灰	珠紋
44	4	SL04	4~4.5層	瓦	丸瓦		14.5		2.0	にぶい黄緑	釘穴2、瓦をぐるく無式軒丸瓦か 棟、コビキA、細布目、吊る組、 棒状卯痕
45	4	SL04	4~4.5層	瓦	丸瓦		12.2		2.2	灰	
46	4	SL04	4~4.5層	瓦	丸瓦		14.6		2.1	暗褐	コビキB、粗布目、棒状卯痕
47	4	SL04	4~4.5層	瓦	丸瓦		14.5		2.0	灰	コビキB、粗布目、棒状卯痕
48	5	3層	土師器	かわらけ	反		14.6	2.8	(9.8)	黄緑	ロクロ成形
49	5	3層	瓦	軒丸瓦			14.8	32.6	1.8	灰	左巻三巴紋+珠紋(10)、釘穴1
50	5	3層	瓦	軒丸瓦					2.1	灰白	左巻三巴紋+珠紋(10)
51	5	3層	瓦	軒丸瓦					2.5	灰	左巻巴紋+珠紋
52	5	3層	瓦	軒丸瓦					2.2	灰	左巻巴紋+珠紋
53	5	3層	瓦	構瓦						灰	左巻三巴紋+珠紋(10)
54	5	3層	瓦	軒平瓦			1.4			灰	五葉紋3反転均整唐草紋、縫線を 切り落とす
55	5	3層	瓦	軒平瓦						灰	均整唐草紋、縫線を切り落とす
56	5	3層	瓦	軒平瓦			1.8			灰黄	三葉紋3反転均整唐草紋
57	5	3層	瓦	軒平瓦						灰	均整唐草紋
58	5	3層	瓦	丸瓦			2.5			灰	無段式の解瓦か
59	7	3層	須恵器	飾台	反					灰	
60	7	3層	瓦	飾り瓦						灰黄	
61	8	2層	瓦	軒丸瓦						灰	無字錢紋
62	10	2層	瓦	軒丸瓦						暗灰	左巻三巴紋+珠紋
63	10	2層	瓦	軒丸瓦(丸瓦部)			1.9			淡黄緑	左巻三巴紋
64	10	2層	瓦	軒丸瓦(丸瓦部)			1.8			灰白	巴紋+珠紋
65	10	2層	瓦	軒平瓦			2.0			灰	菊瓣唐草紋、残瓦か
66	10	2層	瓦	軒平瓦			2.3			灰	
67	10	2層	瓦	平瓦			1.8			灰	狹端面にヘラ彫き(○)

図 版  
PLATE





1\_1 トレンチ 全景 (南から)



2\_1 トレンチ 堀跡 (SD01) 北岸 (南から)



3\_1 トレンチ 全景 (北から)



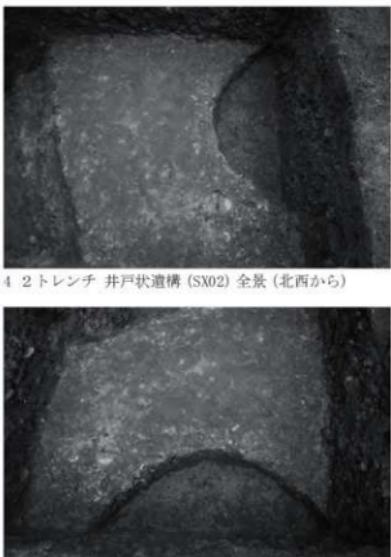
1 2 トレンチ 全景 (南西から)



2 2 トレンチ 全景 (東から)



3 2 トレンチ 堀跡 (SD02) 南西岸 (南西から)



4 2 トレンチ 井戸状遺構 (SX02) 全景 (北西から)

5 2 トレンチ 井戸状遺構 (SX02) 全景 (南西から)



1 2 トレンチ 溝状遺構 (SX01) 全景 (南西から)



2 2 トレンチ SX01 下層須恵器底出土状況



3 2 トレンチ SX01 下層灰釉腰折皿 (18) 出土状況



4 2 トレンチ SX01 下層擂鉢 (20) 出土状況



5 2 トレンチ SX01 下層把手付鉢 (17) 出土状況



1 3 トレンチ 全景 (北より)



2 3 トレンチ 全景 (南西より)



3 3 トレンチ 堀跡 (SD02) 南西岸と南東壁断面 (北より)



1-4 トレンチ 全景(西より)



2-4 トレンチ 全景(東より)



3-4 トレンチ 3-1層上面埴瓦出土状況(南西より)



4-4 トレンチ SL03と埴瓦出土状況(南西より)



5-4 トレンチ SL03と埴瓦出土状況(南より)



1 4 トレンチ 登り堀跡西側石垣 (SL03) 完掘状況 (西より)



2 4 トレンチ SL03根石 (西より)



3 4 トレンチ SL03内の丸瓦 (西より)



4 4 トレンチ SL03と柱穴 (南より)



1 5 トレンチ 全景 (西より)



2 5 トレンチ SL04の南下がり斜面 (南西より)



3 5 トレンチ SL04の南下がり斜面 (西より)



1 6 トレンチ 全景 (南西より)



2 6 トレンチ 北壁断面 (南より)



3 7 トレンチ SL02 西端上面 (北西より)



4 7 トレンチ SL02 西端上面 (東より)



1 8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) 残存部西側 (南より)



2 8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) 残存部東側 (南より)



8 トレンチ 本丸南側石垣 (SL02) 裏込完掘状況 (西より)



1 8 トレンチ SL02西壁側面の裏込状況（東より）



2 9 トレンチ 全景（西より）



3 8・9 トレンチ SX03完掘状況（北より）



4 8・9 トレンチ SX03底の円砾（北東より）



1 10-1 トレンチ 調査状況 (北より)



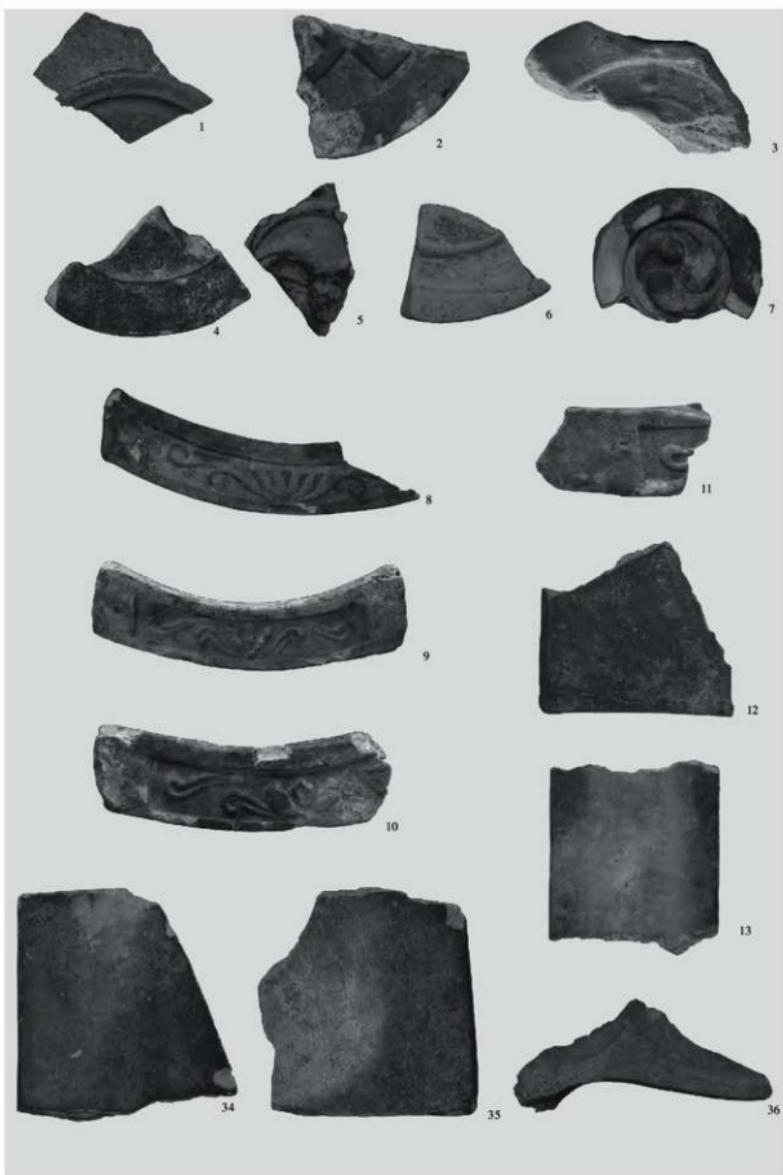
2 10-2 トレンチ 調査状況 (南より)



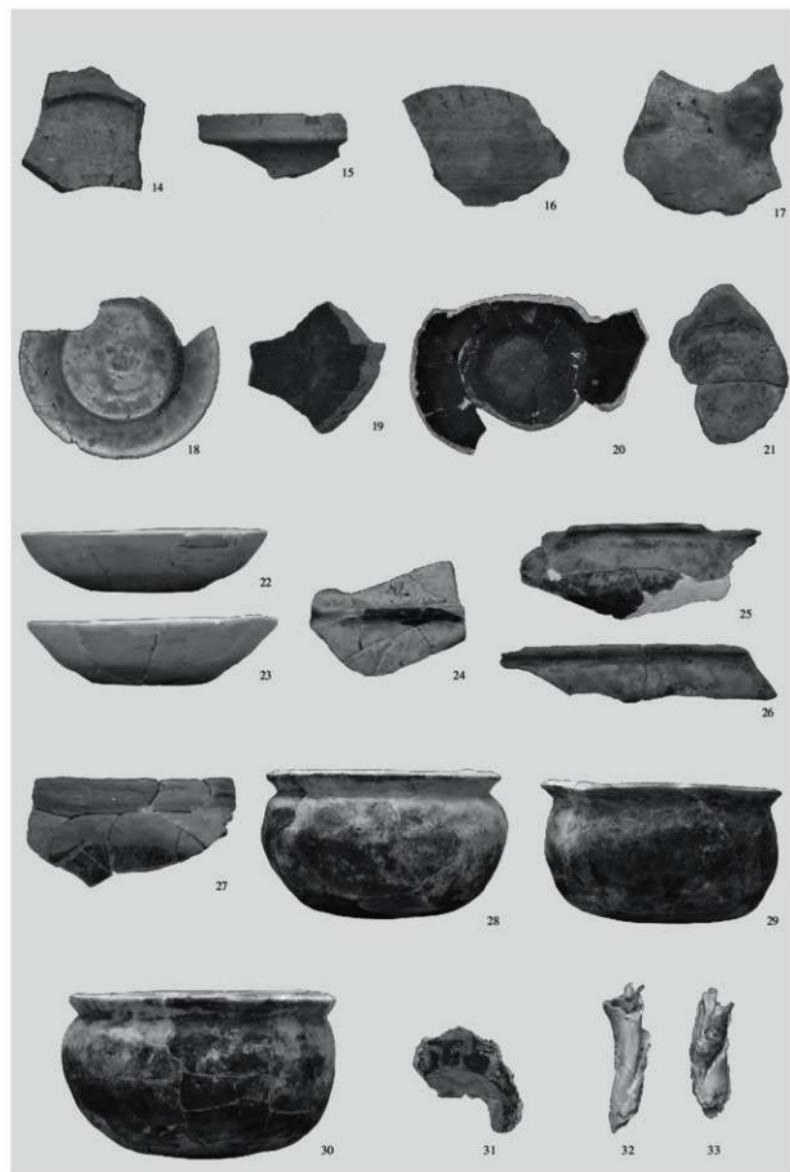
3 10-3 トレンチ 調査状況 (北より)



4 10-4 トレンチ 調査状況 (北より)



1・3 トレンチ出土遺物 (1T: 1~13, 3T: 34~36)



2 トレンチ出土遺物



4・5 トレンチ出土遺物 (4T: 37~47、5T: 48~49)



5・7・8・10 トレンチ出土遺物 (5T : 50 ~ 58, 7T : 59・60, 8T : 61, 10T : 62 ~ 67)

## 報告書抄録

書名（ふりがな）	浜松城跡 11 (はままつじょうあと 11)							
編著者名	井口智博、辻広志（編）							
編集機関	浜松市教育委員会 ☎430-0929 浜松市中区中央1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） ☎430-8652 浜松市中区元町103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (053) 457-2563							
発行機関	浜松市教育委員会							
発行年月日	2016年2月10日							
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はままつじょうあと 浜松城跡 (14次調査)	静岡県 浜松市中区 元町	22131	01-04-13	34度 47分 30秒	137度 45分 15秒	2015年 6月19日 ～ 9月30日	248m <sup>2</sup>	確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	特記事項				
浜松城跡	城跡	戦国時代 江戸時代	土師器 陶磁器 瓦	本丸南側石垣と登り廻西側石垣跡を確認。 西端城曲輪にて溝状造構と井戸状造構を確認。				

## 浜松城跡 11

2016年2月10日

---

編集機関 浜松市教育委員会  
浜松市市民部文化財課  
(教育委員会の補助執行機関)  
〒430-8652 浜松市中区元城町103-2

発行機関 浜松市教育委員会  
印 刷 アインズ株式会社

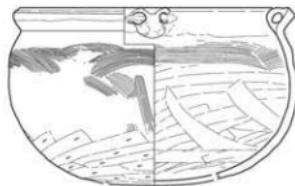
---



# Hamamatsu Castle

The 14<sup>th</sup> excavation report

A Report of Archaeological Investigation on 16<sup>th</sup>-19<sup>th</sup>  
Century Castle in Western Shizuoka, Japan



February, 2016

Hamamatsu Municipal Board of Education